

第2章 713～724年——杜甫の少年期

開元元年 [713年] ～開元十二年 [724年] 杜甫2歳～13歳。

■資治通鑑 卷210 [杜甫2歳]

【**解題**】『資治通鑑』から杜甫が2歳になった開元元年 [713年] の記事を読む。太平公主と玄宗皇帝との関係は緊迫の度合いを増していた。

【訳文】

[713-02]開元元年一月、吏部尚書の蕭至忠を中書令にした。

【**補足**】[通鑑 712-07 で、太平公主に靡いた人物として記されていた蕭至忠は中書令、つまり宰相に昇進した。めでたく念願成就となったのである]

【訳文】

[713-11]六月。太平公主は上皇の權威に依拠して権力を操り、身勝手な政治を行ったことから、皇帝との間に軋轢が生じていた。七人いる宰相のうち、五人が太平公主の息のかかった人物で、文官も武官も大半が太平公主に付いた。竇懷貞、岑羲、蕭至忠、崔湜と、太子少保の薛稷、雍州長史の新興王李晋、左羽林大將軍事の常元楷、知右羽林將軍の李慈、左金吾將の李欽、中書舍人の李猷、右散騎常侍の賈膺福、鴻臚卿の唐駿、および僧の慧范たちは皇帝の廢立[玄宗皇帝を廢して、別の者を皇帝にする]を相談し、宮人[宮中に務める女性]の元氏と謀って、赤箭粉[漢方薬]の中に毒を混ぜて皇帝に飲ませよとした。……

王琚は皇帝に、「事態はし迫っています。速にちらが動かなくはなりません」と、言った。左丞の張説は東都[洛陽]から人を遣わして皇帝に佩刀を献上した。その意は、皇帝に断ち割る決断を促すも

のであった。

荊州長史けいしゅうちやうしの崔日用さいにちやうは奏上する用向きがあつて(上京して)皇帝の前に進み出ると、「太平公主様はかねてから反逆を謀っています。陛下が(三年前に)東宮とうきゆうにおられましたときにはまだ皇帝の臣下でありましたから、不埒な者を討とうとしても、謀はかりごとを用いなければなりません。いまはすでに皇帝として臣下に君臨しておられるのですから、一枚の制書せいしょをお下しになれば、従わない者は一人もいません。万が一にも奸人かんじんたちが志を得てしまつてからでは悔いても遅いのですぞ」と言った。皇帝は、「誠にそなたの言う通りである。ただ、上皇様を驚かしてしまうことを恐れているのだ。崔日用は、「天子の孝は天下を安らかにすることにあるのではありませんか。もしも奸人どもが志を得てしまつたなら、国は廢墟かんじんと化し、孝などというものは存在なくなつてしまいます。まずは北軍ほくぐん[近衛兵の一部]を指揮下に置き、それから逆党ぎやくとうを制圧するのです。そのようにすれば、上皇様を驚かすことなく事を収められるであります。皇帝は同意し、崔日用を吏部侍郎りぶじらうにした。

【補足】〔(1) 上皇は妹の太平公主たいへいこうしゆのほぼ言いなりで、太平公主はますます増長し、玄宗皇帝げんそうとの対立は深まっていた。史書は対立関係になつてゐることをよく「隙有りげきあ」と記す〔ここでは「軋轢が生じた」と訳している〕。これは具体的な事柄を明示しないでも使える便利な表現である。歴史家は事件を後から遡つて、対立が表面化し始めたと推測される事象を見出したときに、後知恵で「隙有りげきあ」と記述することが多いようだ。太平公主と玄宗皇帝の場合、早くから対立関係が生じていたのは間違いなく、ただ両者は叔母と甥の関係で、とりわけ上皇は穩便に事が収まってほしいとの思いが強かつたので、この時点になつて、「隙有りげきあ」の状態がもはや隠せないまでになつていたのでらう。(2) ここには太平公主側が玄宗皇帝の毒殺まで計画していたことが記されている。ただし、歴史の記録は必ず勝者の側が残すものであるために、たとえ関係者が犯罪を認めたとしても、必ずしも信用できない。(2) 王琚おうきよと張説ちやうえつの名はすでに通鑑 712-23 で見ている。玄宗皇帝に近い人物で、張説は太平公主に嫌われて洛陽らくやうに出

されていた。(3) 崔日用さいにちようの登場は重要な意味を持っている。かつて中宗皇帝ちゆうそうが韋皇后いによって毒殺された後で、当時は東宮とうぐうにいる一皇子にすぎなかった玄宗皇帝は太平公主と協力して武力を行使して韋皇后一派を亡ぼしたのだが、その計画を練ったのが崔日用であった。崔日用はその後、太平公主一党と対立して地方に出されていた。(3) 玄宗は「上皇を驚かす」ことをさかんに心配している。これは単純に上皇をびっくりさせるという意味ではない。玄宗が最も恐れていたのは、皇帝と上皇が衝突するという構図になってしまうことであった。軍事権は上皇のもとにあったので、崔日用は、自由に動かせる武力をまず確保しておくよう皇帝に忠言したのである]

【訳文】

[713-11 つづき]秋、七月、魏知古ぎ ち こは太平公主たいへいこうしゅに、「この月の四日に乱を起こしましう。常元楷じょうげんかいと李慈りが羽林兵りりんへいを率ぶいて武徳殿ぶとくでんに突入するとともに、竇懷貞どうかいてい、蕭至忠しょうしちゆう、岑羲しんぎ等なんがが南牙なんがで兵を挙げてそれに応じるのです」と、告げた。

皇帝きおうは、岐王りはんの李範せつおうぎやう、薛王かくげんしん業りやう、郭元振ぶしやうじん、および竜武將軍りゅうぶしやうぐんの王毛仲おうもうちゆう、殿中少監でんちゆうしやうかんの姜皎きやうこう、太僕少卿たいぼくしやうしやうの李令問りれいもん、尚乘奉御しやうじやうほうぎの王守一おうしゅいち、内給事ないきやうじの高力士こうりきし、果毅かきの李守徳りしゅとく等とともにそれらの者を誅殺する計画を定めた。……

甲子こうし[三日]、皇帝おうもうちゆうは王毛仲かんきやうに命じて、閑厩かんきやうの馬と兵士三百人余りを取り、武徳殿ぶとくでんから虔化門げんかもんに入いった。常元楷じょうげんかいと李慈りを呼び寄せ、まずその二人を斬った。次いで内容省ないかくしやうに行いって賈膺福かやうふくと李猷りゆうを擒とりこにして引き出し、朝堂ちやうどうで蕭至忠しょうしちゆうと岑羲しんぎを執とらせ、全員を斬った。竇懷貞どうかいていは逃げて溝の中に入り、自分で縊死どくしたので、その屍しを切り刻み、その姓せいを毒と改めた。

上皇しやうてんもんちゆうは変を聞きいて承天門かくげんしん楼ろうに登のぼった。郭元振かくげんしんは、「皇帝陛下こうは誥こう[上皇の命令]を奉じて竇懷貞等なんがを誅殺しただけで、他には何事もありません」と、奏上そうじやうした。続いて皇帝が楼上しやうれいに至いたった。上皇は竇懷貞等なんがを断罪まんざんする誥こうを下くだし、天下てんかに赦令しやくれいを出だし、たゞ反逆はんぎやくの徒との親党しんたうだけは赦さないとした。万年まんねん梟

の獄せつじょくに捕まった薛稷は死を賜った。

乙丑いつしゅう、上皇は、「今からは軍国政刑はすべて皇帝が処分する、朕ちんは何もすることなく志を養い、素心そしん
[退隱の思い]を遂げるまでである」との詔を下した。この日のうちに百福殿ひゃくふくでんに移った。

【補足】〔(1) 殺すか殺されるかの緊迫した状況下で、太平公主側は7月4日をXデーと決め、玄宗皇帝側はその前日に事を起こした。ただし、これは勝者側の残した記録に基づくもので、相手側が仕掛けようとしたのでやむをえず先手を打ったということにして、自分たちの行為を正当化しようとしたと見るべきかもしれない。ここに記述されているように、玄宗皇帝は武力行使の先頭に立って、敵側とみなした者をその場で次々に斬り捨てている。これがこのころの宮廷内抗争のやり方で、勝った側が正義なのである。(2) 竇懐貞の姓を毒どくに改めたとあるのは、反逆者と認定した者に不名誉な姓を与えるのがこのころの流行りであった。竇懐貞等を断罪する上皇の命令は後出しであったのだろう。(3) 上皇は一切の権限を手放して無為に過ごすと宣言した。それが前々からの思いであったというのは、半ば以上は本音であったのだろう。上皇は、中国史上唯一の女帝を母に持ち、本人も含めて兄弟全員が母によって生殺与奪の権を握られた状況下で過酷な半生を生き、母の呪縛からほどかれたと思ったら、兄は妻に毒殺され、次いで妹の太平公主と息子の玄宗皇帝の争いに脅かされたのであるから、権力抗争の場から一刻も早く逃れたかったに違いない。(4) なお、蕭至忠しょうしちゆうの運命はずでに通鑑 712-07 で予言されていた。後世の歴史家は結果を知っているので、あたかも事前にはわかっていたことであったかのように史書を編集することが往々にしてあるので、単純に感心してはいけない]

【訳文】

[713-11 つづきのつづき]太平公主は逃げて山の寺に入り、三日でそこから出て、家で死を賜った。公

主の諸子やその一党の者の死者は数十人であった。(太平公主の息子の)^{せつそうかん}薛崇簡たけははははばば母を諫め、鞭で打たれていたの、特に死を免れて、(皇帝と同じ)^り李の姓を賜り、官爵はもとのままとされた。太平公主の家を没収したところ、財貨が山積みで、珍しい宝物は宮中の倉にあるものに匹敵し、飼われていた羊や馬は多数で、貸し出した錢の利息は数年経っても回収できないほどであった。

……

先に皇帝は竇懐貞等を誅殺しようと考えたときに、^{さいしよく}崔湜を呼んで、心腹を託そうとした。そのとき、崔湜の弟の^{さいてき}崔滌は兄に言った。「陛下からのお尋ねがあつたなら、隠し事をしてはいけません」。崔湜はそれに従わなかった。竇懐貞等がすでに誅殺されると、^{ゆうじよう る そうよう}崔湜と右丞の盧蔵用はともに太平公主に私的に奉仕したことをもって、^{どうしゆう ろうしゆう}崔湜は竇州に、盧蔵用は瀧州に流された。^{しんこうおう りしん}新興王の李晋は死刑の場に臨んで、「もともとこれを謀ったのは崔湜であつたのだ。いま私は死に、崔湜は生きている。これは冤罪である」と、嘆いた。また、^{ゆうし}有司[^{きやうじん げん}役目の者]が宮人の元氏を取り調べると、元氏は崔湜も一緒に毒殺の相談をしたと白状した。それで崔湜には追つて^{けいしゆう}荊州で死を賜つた。……

^{きし}己巳、^{かくげんしん}功臣の郭元振等を賞して、^{さんほく}官爵、^{こうりきし}邸宅、^{ゆうかんもんしゆう}金帛などをそれぞれに与えた。高力士は右監門將軍知となつて^{ぐんち}内侍省[^{ないししゆう}皇帝の私的な空間に仕える^{かんがん}宦官の職場]の事を統率することになつた。唐の初めに^{たいそう}太宗皇帝が制度を定めたときこは、^{さんほんかん}内侍省には三品官を置かず、(下位の者であるしらの)黄色の衣を付け、食事が支給されるだけで、その役割は門を守り、命令を伝えることだけとされた。武則天は女性であつたが、^{そくてん}宦官が政事に関わることはなかつた。^{ちゆうそう}中宗皇帝のときに^{へいこう}嬖倖[皇帝の身近に仕える女性たち]が極めて多くなり、^{しちほん}宦官の七品以上が千人を越えた。それでも(高位の者であるしらの)緋色の衣を付ける者はなお少なかつた。高力士は、皇帝が(まだ皇太子になる前に)^{ほんてい}籙邸にいたときから、心を尽くして奉仕し、^{ないきやうじ}皇太子になつてからは^{しやうしちゆう}内給事になり、^{しんぎ}蕭至忠や岑羲を誅殺した功績を賞してここに至つたのだつた。宦官はこれより次第に増えて三千人を越え、三品や將軍になる者が多くなり、緋色や紫色の衣を着る者が千人を越えるまでになつた。つまり、宦官が盛んになることはこのときに始まつたのである。

【補足】〔(1) 事件後の処置が記されている。太平公主は家で死を賜ったとあるのは、^{たいへいこうしゅ}罪人として処刑されるのを免除されただけましなのである。太平公主が莫大な私財を貯め込んでいたのは事実であったのだろうが、『資治通鑑』の記事を見直して太平公主の政治がどれほど悪かったのかという具体的な記事は実は見当たらない。ここでことさらに太平公主の悪さを印象付けようとしているのだろう。^{ぶそくてん}武則天、^{いこうこう}韋皇后、太平公主が権力を掌握した時期を、昔の中国の史家には女性が中心にいたというだけで「悪」と決めつける傾向が強くなるので、「悪」であるとする論拠を提示する必要性はさほど考えていなかっただろう。それでも玄宗皇帝の武力行使を正当化するには太平公主の蓄財が度外れたものであったと書いておかないと落ち着かない気がしたのだろう。(2) ^{さいしよく}崔湜は機敏に力のある側に付こうと振る舞い、最後に判断を誤ったのだろう。崔湜でさえ間違えるのだから、^{げんそう}玄宗皇帝側が敗者となる可能性も十分に高かったのだろう。(3) ^{こうりきし}高力士に関連して、^{とうちよう}唐朝の宮中において^{かんがん}宦官が増え、地位が高まって行ったことが記されている。去勢された男性の宦官は、中国の皇帝政治においては必要不可欠のものとされ、^{かん}漢の時代に宦官が国政に介入して大変な害をなしたことから、その後の王朝は宦官が権力を握らないように注意していた。玄宗皇帝が高力士を特例で優遇したことから、宦官が次第に大きな力を持つようになり、唐朝の後半には国政に甚だしい害を為すようになるのである〕

【訳文】

[713-20]……十月甲辰、^{こうしん}皇帝は^{いせん}渭川で狩りをした。皇帝はかねてから^{どうしゅうし}同州刺史の^し姚崇を宰相に用いようと思っていた。しかし、(宰相の)^{ちやうえつ}張説は姚崇を嫌い、^{ぎやうし}御史大夫の^{だいいふ}趙彦昭を使って皇帝の前で姚崇を批判したことがあった。皇帝はその意見を^い納れなかったので、さらに^{でんちゅうかん}殿中監の^{きやうこう}姜皎を使って皇帝にこのように告げさせた。「陛下は河東総管には誰がよいのか、なかなかよい者がいないと常々困

っておられますが、臣わたくしはいまよい人を思いつきました」。皇帝がそれは誰かと問うと、姜皎は、「姚崇は文武の才を兼ね備え、まさにぴったりの者です」と、言った。皇帝は、「それは張説の考えてあろうな。そなたが我が面前まへで欺あざむこうとするのなら、その罪は死に当たるぞ」と、言った。姜皎は頭を地に打ち付けて謝った。

皇帝は狩りの場から中使ちゆうし [宦官かんがんの使者] を派遣して姚崇ようすう を行在あんざい [皇帝の宿舎] に呼んだ。姚崇が来ると、皇帝は呼び寄せて会い、すくに兵部尚書同中書門下三品へいぶしょうしやうちゆうしやもんかさんほん [宰相] に任命した。

姚崇は政務に極めて明るく、宰相を務めるのは三度目で、いつも兵部尚書を兼務し、辺境の地の事情についても詳しく、士馬や武器の備えについてまですべて記憶していた。

玄宗皇帝は即位した当初は、精力的に政治に取り組み、事あるごとに姚崇に尋ね、姚崇は響くように応じて答え、他の同僚はたまた顔付けであった。それで皇帝はもっぱら姚崇に事を委ねた。

【補足】 [(1) 武力抗争が終結すると、玄宗皇帝は人の入れ替えを順次行った。武に優れた者と文に優れた者は必ずしも一致しない。ここには実務に長けた姚崇ようすう を宰相に用いたことが記されている。姚崇はかつて武則天によって宰相に拔擢され、睿宗のもとでも一度宰相になり、太平公主とは対立して地方に出された。玄宗皇帝は狩りのために郊外に出た折に、近くにいる姚崇を呼んで宰相に任命した。武力抗争の功績をもって宰相になっていた張説ちやうせつ が姚崇を嫌ったのは、姚崇の才能を恐れたからである。玄宗皇帝はそのあたりのことも承知していて、張説はその後、朝廷の要職からははずされてしまう。(2) ここで、玄宗皇帝は即位した当初は精力的に政治に取り組んだと書かれているのは、史書を読むような人は玄宗皇帝の後半生について当然知っているとの前提で注意を促しているのである]

【訳文】

[713-21]……姚崇が頃ちゆうすう に従って郎吏ろうり を昇進させる人事について皇帝に奏上した。皇帝は建物の天

井の方を眺めていた[奏上した書面を見なかったということ]。姚崇は何度か奏上の件について申し上げた。しかし、皇帝からはついに応答がなかった。姚崇は懼れ、小走りて退いた。

朝議が終わると、高力士が皇帝を諫めた。「陛下は国政の全てを見られるようになったばかりでございます。宰相や大臣が陛下の前で事を奏したならば、ただちに可否をお答えするべきではないのですか。一切御覽にもならないというのでよろしいのですか」。皇帝は言った。「朕は姚崇に政務全般を任せただ。大きな事があったなら奏上してもらってともに議論をしよう。郎吏は官僚としても低い地位の者だ。それくらいのことではいち朕を煩わすまでもない」。

たまたま高力士が皇帝からの使いで省中に行った折に、姚崇のために皇帝のこの言葉を伝えた。姚崇は喜び、これを聞いた者は皆が皇帝が人の上に立つ君主としての振る舞い方を知っていると感服した。

曲江出身の張九齡はよのとき左拾遺であったが、姚崇が皇帝によって重く用いられ、信任されているのを見て、諂諂[浮ついたおべっか使い]を遠ざけて純厚[思慮深く節操のある者]を進めることを皇帝に助言するように記した文章を姚崇に提出した。……姚崇はそれをよいとして聞き入れた。

【補足】[(1) 姚崇と玄宗皇帝とのあるエピソードが記されている。これは皇帝と宰相とのあるべき理想の関係を示したものとして非常によく知られている。玄宗皇帝がおおらかな人柄であることもよくわかる。また、高力士がよい役回りをしている。高力士と玄宗皇帝との信頼関係は厚く、玄宗皇帝が本心を漏らせるほほ唯一の相手であった。そして、高力士がきつと姚崇に伝えるであろうことを意識して、玄宗皇帝は心の内を明かしている。玄宗皇帝と高力士の間には、こうしたちょっとよい話がたくさんある。ただし、高力士を重用したことが後に宦官を増長させてしまう大きな原因になったのは玄宗皇帝の落ち度であった。(2) 最後に名が挙がっている張九齡は、この後、玄宗皇帝を支える名宰相として活躍するようになり、王維、孟浩然、杜甫にも大きな影響を与える]

【訳文】

[713-25]十一月、中書侍郎の王琚ちゆうしよ じ ろう おうきよは皇帝と親密な関係にあって、他の群臣の及ぶところではなかった。会と必ずにこやかに語り合い、王琚は夜になってから退出した。時には王琚が休暇の日であっても中使ちゆうしを遣わして召すこともあった。ある人が皇帝に言った。「王琚には策略を縦横に巡らせる才能があって、これとともに禍乱を定めることはできるでしょう。しかし、これとともに平和の世を守るのは難しいでしょう」。皇帝はそれより王琚とは距離を置くようになり、この月に、御史大夫ぎよし だいいふを兼務したままで北辺の諸軍を監督する役に就けた。

【補足】[王琚おうきよは通鑑 713-11 など]で見たように、太平公主たいへいこうしゆを制しなければならないといちはやく玄宗皇帝に助言した人物であった。状況に応じて人を使い分けられるのが優れた皇帝であって、このころの玄宗皇帝の対応力はみごとであったといえるだろう。玄宗皇帝は情にも厚い人物であったので、後年は人の用い方を誤ることが多くなる]

【訳文】

[713-30]十二月、姚崇ようしゆうが宰相になったために、紫微令の張説し びれい ちゆうえつは恐れを抱き、密かに岐王きおう げんそう [玄宗皇帝の弟の李範りはん]のもとに行き、誠実に仕える旨を申し出た。

ある日、姚崇は便殿で皇帝に会ったときにわずかに足をひきずっていた。皇帝は、「足に疾があるのか」と尋ねた。姚崇は、「臣わたくしに腹心の疾がありまして、足の疾ではございません」と、答えた。「それは何だ」。「岐王様は陛下の大切な弟、張説は陛下ほしんの輔臣であります。ところが、張説は密かに車に乗って岐王様の家に入っています。誤るところがあるのではないかと恐れ、それで腹心に憂いがあるのです」
癸丑きちゆう ちゆうえつ そうしゆう し、張説を相州刺史に左遷した。

【補足】[(1) 張説ちゆうえつは通鑑 713-20 で見た通り、姚崇ようしゆうが起用されるのを阻止しようとしていた。姚崇が宰相として確かに有能であるのを見て、張説は己の居場所がなくなる

のを恐れ、玄宗皇帝の弟の李範^{りほん}に接近した。それはかなり危うい行為であった。(2) 世襲制の逃れられない大きな欠点は、権力の継承を巡って、兄弟、親族間で必ず争いが起こることである。熾烈な宮廷内抗争を経たいま、兄弟をどのように処遇してゆくのか、玄宗皇帝にとって大きな課題であった。睿宗皇帝には6人の息子があって、1人は早くに亡くなっていた。玄宗皇帝は三番目の子で、長男、次男を差し置いて皇帝になった。張説が李範に近づいたのを見て、姚崇はすぐに手を打たないと一大事になると考えた。ここでも玄宗皇帝の対応は早く、張説をすぐに都から追放した。一方で、兄弟に対しては極めて愛情深い対応をしてゆくようになる。武力抗争のときに活躍した人物もこうして順次選別され、政権の中枢から遠ざけられてゆくのだった]

■ [02-杜-01] 祭外祖祖母文

【**解題**】杜甫^{とほ}は、7歳で詩文を作り始めたとして作品番号 01-杜-01 で記していた。それまでどのような幼少期を過ごしたのか、わかることはわずかしかない。特に母については杜甫は語るものがなく、生母^{さい}の崔氏は、杜甫に母の記憶を残す前に亡くなったと推測されている。父の杜閑^{とかん}は盧氏^ろを後妻として迎え、杜甫の四人の弟は盧氏の子であるうとされている。杜甫には少なくとも一人の妹がいた。

ここで読むのは、杜甫の母方の家の受難^{とう}について記した文章である。唐の時代には南北朝時代からの貴族社会の枠組みがなお根強く残っていて、例えば、盧^ろ、崔^{さい}、鄭^{てい}、王^{おう}の四姓が最も高い家柄であるとするといった血筋による序列が依然として強く意識されていた。低い家柄の人は四姓のいずれかと姻戚関係を結んで箔を付けようとし、唐の皇室^りの李氏^りでさえ例外ではなかった。皇室は崔一族と密接な姻戚関係を築き、杜甫の生母は崔氏の娘であったから、結果として、杜甫は皇室と間接的に結びつきがあった。

武則天ぶそくてんの時代に皇族の李氏は大変な迫害を受けた。武則天が皇位に就くに当たっても、それを維持するに当たっても、最も警戒しなければならない相手は皇族であったからだ。武則天は危険を察知すると自分の子であっても容赦しなかった。武則天の時代に多数の李氏が命を奪われ、李氏と姻戚関係の深い杜甫の母方の崔氏にも甚大な影響が及んだ。ここで読む杜甫の文章にはそうしたことが背景としてある。

最初に鄭宏之ていこうしの名が挙げられている。杜甫の母方の祖母には少なくとも二人の娘があって、一人は杜閑とくかんに嫁いで杜甫を生み、もう一人は滎陽けいようの鄭氏ていに嫁いで鄭宏之を生んだ。杜甫と鄭宏之は従兄弟であって、二人とも少年のころに母を喪った。この文章は二人にとって共通の祖母について記している。

【訳文】

この年この月この日、滎陽けいようの鄭宏之ていこうしと京兆けいちようの杜甫とほの二人の外孫は、謹んで寒食かんしょく〔冬至から105日目の節句〕の御馳走みそをもって奠え、母方の祖父母の霊にお告げする。

嗚呼あゝ、いま我らの母方の祖父母の家には祭祀をする主しんがい。晋の時代に我が子を棄てざるを得なかった鄭伯道ていはくどうに何の罪があったというのか、晋の時代の魏舒ぎじょは孤児となったときに母方の祖母によって育てられた〔我等二人は棄てられたわけではないのに、母方の祖父母はいない〕。

過ぎ去った遥か昔、艱難を追思すれば、まさに太后たいこう〔武則天ぶそくてん〕が政治を行ったときに、内宗ないそう〔皇族の李氏り〕は縷ほりきれのようにさされてしまった。母方の祖母は、紀王きおうであった李慎りしん〔太宗皇帝の子〕の孫であり、母方の祖父は、舒王じょおうであった李元名りげんめい〔高祖皇帝の子〕の孫であった。二人とも高貴な親類に囲まれて暮らしていたのだが、仇敵が狂ったように集まり、祖母は一人ぼっちとなって世に沈み、祖父は羽を折られた鳥のように鳴いた。惻惻てつてつとして心に憂い、踽踽くくとして独り歩まねばならなかった〔李慎も李元名も武則天によって殺害されたことをいう〕。悲しいことに鳳凰ほうおう〔皇族の李氏〕はたちまちに飛び去り、讒言は鸚鵡のように何度も繰り返されたのだった。

祖母の父[李慎の子の李悰]^{り そう わざわい}が禍に遇い、祖母の母[李悰の妻の周氏]^{しゅう}が獄に下されたときに、牢獄は暗く深く、役人はいづれも酷薄であった。祖母は襪褌を纏い草鞋を履いて、こっそり食事を差し入れに行った。天の秘められた定めはどのようなことであったのか、長く衰敗を経てついに祖母もまた亡くなってしまったのだった。李悰の事績とその名は燕公[張説]の筆による追悼文に残された。

嗚呼、哀しいではないか。(祖母を同じくする)鄭宏之と杜甫は母方の兄弟に従い、両家ともにそれに依拠し、鄭宏之も私も少年ときともに苦勞^{じ がん}し、慈顔[母の顔]とは永遠に別れたのだった。

この世に親の愛に勝るものはなく、親がいなければ帰すべきところを知らない。我らは過ぎ去った昔の光輝を恋い、助け合って卑賤のままではないことを誓うのである。幸いにも聖主^あに遇えたいま、よい機縁によって、名を内外^あに顕わして、雄飛することを願うべきである。

らくよう ほうざん
洛陽の北、邙山の蔭に樹が並び風に霧が巻き、冷たい泉に珠玉のような水が湧いている。千年を経た古の道を人々は歩み去って帰らない。この三月の晴天に春の草は伸び、緑は増しつつあり、季節の事物が次々に起こるなかで、血の涙が流れ続けて止まることがない。奠^{そなえもの}を奉じていつまでも思いを寄せるものである。毎年ここにきて墓所を清掃し続けて歳月を送ろうと思う。

【補足】〔(1) この文章をいつ書いたのかは明らかではない。三十代ごろであるのだろう。寒食節^{かんしょくせつ}のころには先祖の墓参りをする習慣があり、杜甫と鄭宏之は従兄弟同士で連れ立って母方の墓に詣でた。(2) 杜甫の母方の祖母は、太宗皇帝の子の李悰の子の李悰の娘であった。祖母の夫は崔一族で、高祖皇帝の子の李元名^{りげんめい}の孫に当たった。つまりは申し分のない家柄であったのだが、武則天^{ぶそくてん}に迫害されて父母を喪い、さらには自身も亡くなった。(3) 「母方の祖父母の家には祭祀をする主がいらない」と記されているのは、迫害された結果として祖父母の家を継ぐ者がいなくなってしまったからだろう。(4) 後に見るように、杜甫は唐朝^{とうちやう}が栄えること常に切実に望んでいた。人民として皇帝に忠誠を尽くすべきであるという考えに縛られていたからだと冷ややかに見るのは、幾つかの意味でかなりの外的外れであろう。一つには、杜甫にとって皇室の受

難は雲の上の話ではなく、自身の身近なところのものであったのだ。(5) 洛陽らくようの北の
邙山ぼうざんは古くから墓地があり、よい家柄の母方の墓はきっと邙山の中でもよい場所にあ
ったのだろう]

■ [02-孟-01] 孟浩然：尋白鶴巖張子容顔処士

【解題】この年の初めに都かきよで科擧の本試験もうこうねんが実施され、孟浩然の親友の張子容ちようしやう [→作
品番号 01-孟-01] は合格し、すぐに官職を得た。襄陽じやうやうに残った孟浩然是、いつのころ
か、張子容がかつて住んでいたことのある場所を訪ねた。この詩の題は、テキストに
よっては、『尋白鶴巖張子容隱居』になっているものがあって、「顔処士」の三文字が
欠けている。ここではそれに従って張子容のかつての庵いおりを訪ねた折の詩であるとの理
解のもとに訳す。

【訳文】

白鶴巖はくかくがんの青い巖いわおのあるあたり、
ある隠者ちやうしやう [張子容] が棲んでいた庵いおりがある。
階きざしのもとには、水の食む石がそのまま残り、
林に包まれた谷きこりには、いまは樵も漁師もない。
歳月を経た青い松が老いてなお立ち、
風や霜に堪える竹がまばらに生えている。
このありさまを見て、昔おものことを懐い一つ、
馬を廻らして吾いおりが廬へと帰る。

【補足】 [白鶴巖はくかくがんは、襄陽じやうやうの町の東にある岷山けんざんから南方に連なる山地の一角にある。
張子容ちやうしやうは一時期そこに庵いおりを結び、後に鹿門山ろくもんざんに移ったのだろう。その庵の跡を訪ね

もうこうねん
た孟浩然は何を思ったのだろうか]

■資治通鑑 卷211 [杜甫3歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫が3歳になった開元二年 [714年] の記事を読む。

【訳文】

[714-03] 正月、旧来の制度では雅俗の音楽は全て太常寺[官署の名称]に属していた。玄宗皇帝は音律に通曉して、太常寺は本来は礼楽に関する部署であるのだから、倡優雜伎[芝居や各種の芸能、つまり雅俗の俗の方の事柄]についてまで監督すべきではないと考えた。そこで、宮中に左右の教坊を設けて俗楽を教えることにし、右驍衛將軍の范及に命じてその長官にした。また、樂工[演奏家]を数百人を選び、(皇居にある)梨園において音楽を自ら指導した。その樂工は「皇帝梨園の弟子」と呼ばれた。また、宮女にも音楽を習わせた。さらに、伎女を選んで宜春院に置き、その家に金品を支給した。

礼部侍郎の張廷珪と酸棗の尉の袁楚客等が以下のように上疏した。「陛下は盛りの年に達せられ、いまは経術[治世の学問]を学び、きちんとした君子を近づけ、素朴であるのをよしとし、軽薄な音楽を喜んだり度を超して遊獵を好んだりするのを戒めるべきときであります」。皇帝はその意見は用いることはできないとわかってはいたが、言路を開くために[臣下の者が意見を言いやすくするために]、その上疏を賞賛した。

【補足】 [(1) 歌舞伎などの俳優の世界を「梨園」というのは、ここに記されている玄宗皇帝の故事からきている。(2) 玄宗皇帝は多芸多才で、そのもとで大いに文化が花開いた。しかし、文化に向ける関心の度合いが強すぎると、奢侈であったとして歴史家から批判されがちである。終わりのところに、「その意見は用いることはできないとわかってはいたが」 [原文は「雖不能用」 [用いる能ずと雖も]] とあるのは歴史

家による挿入句で、後の玄宗皇帝の振る舞いからこのように（勝手に）推量している
のである]

【訳文】

[714-26]玄宗皇帝は風俗が奢靡しゃびに流れていると見て、秋、七月乙未に次のように指示した。「乗り物の飾りや金銀の器具は、しかるべき部署において潰し、軍国の用に供するように。珠玉や錦繡は殿前において焚ほくように。皇后以下の者は、衣服に珠玉や錦繡は付けないように。戊戌にはまた次のように指示した。「百官が帯びる服や帯、および酒器、馬銜、鐙は三品以上の者には玉ぎよくをもって飾ることを許し、四品以上は金をもって飾ることを許し、五品以上は銀をもって飾ることを許す。その他は禁止する。婦人の服飾はその夫や子に準じる。以前に錦繡をもって飾った衣服は黒く染め直すように。これからは珠玉をあしらったり、錦繡を織ったりしないように。違反する者は杖で一百回撃ち、工人はそれより一等減じる」。これによって西京[長安と洛陽]の織錦坊[織物工房]を閉鎖した。

【補足】[玄宗皇帝は率先して質素儉約であることを実践しようとした。儒学の観点からはこれはよいことであって、後に、玄宗皇帝が華美を好むようになることをもって史家は自身の戒めを守れなかったと批判する。しかし、ここに「織錦坊を閉鎖した」とあるように、経済発展の面からすると、質素儉約の号令は必ずしも民衆のためにはならないのだろう]

【訳文】

[714-37]九月戊申、玄宗皇帝は驪山の温湯に行いった。

【補足】[驪山は長安の東 25 キロほどにある景勝地で、温泉が湧くことで皇帝の保養地として利用された。『資治通鑑』は玄宗皇帝がいつ驪山を訪れたのかを丹念に記録する。贅沢を戒める号令を出していながら、自身はほぼ毎年のように冬になると驪山

に遊びに行っている。後に、玄宗皇帝は楊貴妃のために驪山に豪華な華清宮を建てる]

■ [02-杜-02] 唐故万年県君京兆杜氏墓誌

【解題】杜甫は、生母の崔氏が亡くなった後は、地方に赴任する父に従うのではなく、生地とされる瑤湾村の近くの仁風里に住む父の姉妹のもとで育てられたようだ。ここで読むのは、これより28年後の天宝元年 [742年] に亡くなった叔母、つまり父の妹のために書いた墓誌である。表題にある「万年県君」は、叔母の夫 [裴栄期] が官人であったことから贈られた称号である。「京兆杜氏」とあるのは、杜一族の本籍地は京兆 [长安の一带] にあると考えていたことによる。この墓誌を正確に訳すのは訳者の能力を超えるので、杜甫の少年時代のエピソードのあらましが知れる程度のごく大まかな訳文を示す。

【訳文】

世間においてある人物の行跡を記録して後の者に示そうとするときに、多くの場合に、その家の者はよく書いてもらおうと文筆家に贈り物をし、また文筆家は媚びてべんちゃらを言うので、百のうちどれが真だか偽たかわからないことになる。ここに金よりも輝く文字で、神に誓って正しいことを記そうとするのは、ひとかたならぬ徳を立て、真実の名を揚げ、女性の範となるべき人であると私が思う人のことで、それこそが万年県君なのである。

……[杜の家の遠い先祖から父、兄に及ぶまでの系譜を記す]……かくして万年県君は中和の気を受けて、徳を身に付けて成長し、優れた君子と巡り合った。すなわち河東の裴栄期を夫とした。裴栄期は済王府の録事参軍になり、同僚から敬われ、立派に勤めを果たした。万年県君はすぐに家風を習い、蔭で夫を支えるのを任として、婦道に純一に努め、常に礼法をもって振る舞い、立派な評判を得た。……[舅姑に仕え、子を育て、遍く人々に対して愛を注いだことを記す]……

てんぽう とうけい らくよう じんふうり かなん
天宝元年某月八日、万年県君は東京[洛陽]の仁風里で亡くなり、越えて六月二十九日に河南
けん へいらくきょうり
県の平楽郷里の原に埋葬をした。……[長男以下の名を挙げて、皆が悲しみに沈んだことを記す]

……

ここに、万年県君の兄の子である杜甫は、喪に服してその徳を記し、それを石に刻むことにした。ある人は、「貴君は実の孝行息子でもないのに、どうしてそこまで孝義を尽くそうとするのですか」と杜甫に尋ねた。杜甫は泣いて答えた。「このようにするべき理由があるのです。万年県君に私は報いなければならないのです」。

杜甫はこどものときに病やまいに臥せ、姑おばたち[父の姉妹]が面倒を見てくれた。万年県君の子も同時に病じよふ気になった。女巫[女性の祈祷師]は万年県君に、「柱の東南に置いた者は吉となりましょう」と言った。そこには万年県君の子が寝ていたのだが、万年県君は杜甫と場所を入れ替え、そのために杜甫は生きられ、万年県君の子は死んでしまった。後になって杜甫は人からこのことを聞いた。それから杜甫はこのことを人々に語り、ある人は涙を流して感動し、万年県君おひなの諡を義としようと言った。

それは昔むかしの魯国の義姑ぎこの故事によるものである。齊国が魯国に攻め込んだときに、一人の女が一人の子を抱き、一人の子の手を引いていた。齊国の兵士が近づくと、女は抱いていた子を地に棄て、引いていた子を抱いて逃げ去ろうとした。兵士は女を射殺そうとしていたのだが、その行為を見て感じるどころがあり、女に向かって、「抱いている子は誰なのか」と尋ねた。女は、「兄の子です」。「棄てた子は誰なのか」。「私の子です」。「どうして自分の子を棄て、兄の子を抱いて逃げようするのか」。「母として我が子を愛するのは私のことです。甥を大切にするのは公おおやけの義です。公の義に背いて私の愛を優先することはできません」。兵士は感心し、將軍にこのことを伝え、「一婦人でさえ節義を大切に
わたし
わたし
するのだから、魯国は立派な国である」と言って、軍を引き返させた。魯の国王はその女に義姑の号を贈った。

万年県君はまさに義姑と同じで、万年県君の事績を記して、その義行を明らかにしようとするものである。万年県君の墓誌銘は敢えて韻を踏まずに作る。至情から出る言葉は飾り立てたりすることはない

からである。その銘とは、

嗚呼、唐の時代の義姑、京兆の杜氏の墓。

【補足】[杜甫が病に臥せたのは何歳のときであったのかはわからない。はっきりとした記憶が残らないくらいに幼くて、後になって人から聞いたのだろう。女巫が言ったことが的中したとは思えないが、杜甫は叔母のお蔭で命拾いをしたと信じていたのだろう]

■資治通鑑 卷211 [杜甫4歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫が4歳になった開元三年 [715年] の記事を読む。

【訳文】

[715-01]春、正月癸卯、盧懷慎は檢校吏部尚書兼黃門監になった。盧懷慎は勤務に励み、儉素で資産を営むことをしていなかった。卿相として高い位にあっても、与えられた俸禄は旧く親しい人々に与えてしまうので、妻子は飢寒を免れることができず、家は雨や風を十分に防ぐことができないようなありさまであった。

姚崇は息子が亡くなったために十日余りの休暇を得た。すると政務が山積みとなり、盧懷慎は決裁できなかったのもので、惶恐して皇帝に詫びた。玄宗皇帝は言った。「朕は天下の事を姚崇に委ねたのであって、そなたはただ座って雅俗を鎮めておればよい」。

姚崇が出てくるとたちに全ての決裁を終えたので、得意気な顔で、紫微舍人の齊澣を顧みて、「わしは宰相として、誰と比べることができるだろうか」。齊澣が答える前に、姚崇は自分で、「(春秋時代の名宰相の)管仲や晏嬰と比べてどのようなものだろうか」。齊澣は言った。「管仲や晏嬰のやり方は後の人は追隨できるものではありませんでした。それでも、管仲や晏嬰の個性が露わになるようなことはありませんでした。貴公のやり方は、適宜変更を加えて行佻なのであって、管仲や晏嬰には及ばないので

はないでしようか」。姚崇は、「なるほど。要するにわしのやり方はどうだというのかい」。「貴公は時を救う者といえるてありましよう」。姚崇は喜び、(政務を行っていた)筆を放して、「時を救う宰相か。それとて得やすいわけではないだろう」

盧懷慎は姚崇とともに宰相であったが、自分の才能は姚崇には及ばないと考えていたので、事があると必ず姚崇の判断に拠った。それで時の人は盧懷慎のことを「伴食宰相」と呼んだ。

【補足】[ここにある姚崇と盧懷慎の二人の宰相のエピソードはいろいろな読み方ができるだろう。「伴食宰相」の語は、ただ一緒に飯を食うだけで実際の仕事はしない無能者であると嘲るような意味合いで使われることが多いが、玄宗皇帝は盧懷慎はいるだけで重みがあると見ていたのだろう。得意顔の姚崇に対して、齊澣が率直に物を言って、それを姚崇が納得して受け止めているのも面白い。姚崇は抜群の処理能力によって、これまでの乱れた政治を正しい軌道に乗せることに大いに貢献したのだろう。そのときに、姚崇が実務処理の枠を出た暴走をしないように盧懷慎が隣にいる必要があったのだろう。そして、玄宗皇帝の新たな時代を切り開くにはまた違ったタイプの宰相の登場を待つ必要があった]

【訳文】

[715-05] 夏、山東で蝗が大きな害をなした。一部の民衆は農地の傍らで香を焚き、蝗を拝んで祭り、蝗を殺さなかった。姚崇は、「御史を派遣し、州や県に蝗を捕らえて埋めるよう促すべきであります」と奏上した。すると、蝗は多すぎるので捕り尽くせない」と意見を言う者があった。皇帝もそれを疑問に思った。姚崇は言った。「いま蝗は山東の地に満ち、黄河の南北の人々は流亡してほとんどいなくなっています。蝗が苗を食うの坐視して救わなっているのでよいのでしょうか。たとえ除き尽くせないとしても、蝗を養って災を成すよりはましであります」。皇帝はそれに従った。盧懷慎は、蝗を殺すことが多すぎると、天地の和気を破るのではないかと心配した。姚崇は言った。「昔、楚莊は蛭を呑んで疾を治し、孫叔

は蛇を殺して福を招きました[悪さをするものは殺してよいという事例]。蝗を殺すのを忍び難いとして、人が飢え死にするのは忍び難くはないですか。もしも蝗を殺して禍わざわいがあるのなら、その禍は私が受けて立ちます」

【補足】[実務じつむに長けた姚崇ようすうはまことに合理的な判断をする。民衆は蝗いなごの害の大きさに打ちひしがれて、祈りを捧げるだけになってしまうのだろうが、姚崇はとにかく蝗を殺す以外に手はないというのである。盧懷慎ろかいしんは慎重な人で、殺すことが多すぎると自然の秩序を乱してしまうと恐れた。姚崇は「時を救う宰相」らしく、決断力がある]

■ [02-杜-03] 観公孫大娘弟子舞劍器行、并序

【解題】これは杜甫が 56 歳のときの詩。50 年以上前の記憶を詩に蘇らせている。序文に記されている年号に従うと杜甫は数えて 4 歳であったので、さすがに幼過ぎるとして年号に誤りがあるとする見方もあるが、ここでは記されているまかいげんまに開元三年の出来事を思い出して詩に詠んだとして見ておこう。この詩の題は、『公孫大娘の弟子こうそんだいじょうが劍器けんきを舞うのを観たときの行』。公孫大娘とは、公孫という姓の大娘。大娘はそこそ那年配の女性。劍器とは舞いの名で、いろいろな考証があるが、西方から伝わった動きの激しい舞いで、女性が男装して踊ったようである。その名の通り、劍を使って舞ったともいわれている。

【訳文】

序
 大暦二年[767年]十月十九日、夔府きふべつがの別駕べんかである元持げんじの邸宅ていたくで、臨穎りんえいの李十二娘りじゅうにじゅうが舞う劍器けんきを見たところ、華やかで勇壮であった。「どの師に習ったのですか」と李十二娘りじゅうにじゅうに尋ねると、「私は公孫こうそん大娘だいじょうの弟子なのです」と答えた。

開元三年[715年]のこと、私はなお童子で稚かったが、郾城で公孫氏が剣器および渾脱を舞うのを観たのを記憶している。瀏灩であり、頓挫として、独り当時において冠たる舞いっぷりであった。(宮中にあった)宜春、梨園の二つ伎坊[歌舞の教習所]の内人の中でも高頭の者から、宮中の外部の者で舞女として仕える者に至るまで、この舞いに精通していた者は誰かといったら、聖文神武皇帝[玄宗皇帝]の時代の初めから公孫氏が一人いただけであった。……[若干の欠文があり、公孫大娘が亡くなったことなどが記されていたと推測される]……まして私はいまや白髪頭になり、この弟子もまた盛りの年の顔ではない。弟子は舞いの由来を語り、師弟において舞いの呼吸が同一であることを知った。事の変転を考えて感じ入るものがあり、剣器の行を作ることにした。

昔、呉の人である張旭は草書を善くして書帖をたくさん遺した。張旭はかつて鄴県で公孫大娘が西河の剣器を舞うのを見て、それから草書の腕前が大きいに進んだという。張旭の豪蕩感激の書風を見るなら、公孫大娘の舞いの妙技が知れるであろう。

【補足】 [(1) 4歳の杜甫少年が公孫大娘の舞いを見たとき記している郾城は、杜甫が成長したと推測されている洛陽郊外の村から直線で100キロ余り南東の地である。(2) 玄宗皇帝が宮中に歌舞の教習所である梨園を設けたことは通鑑714-03で見ている。もともと宮中には宜春の教習所があつて、そこの優秀な者を梨園に入れた。(3) 玄宗皇帝はこの詩の制作年代よりも5年前に亡くなっていて、杜甫はここでは聖文神武皇帝という死後に贈られた名で記している。(4) 張旭は型破りな書風で、書に新生面を切り開いた人であるが、当時はその書はあまり評価されなかった。杜甫はその革新ぶりを認め、ここに記されている舞いとの関係は、張旭の書風の由来を伝える有名なエピソードとして知られている]

昔、公孫氏という佳人がいた。

ひとたび剣器を舞うと、

四方の人々をどっと沸き立った。

観ようとして山のように集まった連中は、

天地がひっくり返るかのように感じ、

誰もが顔色を喪った。

^{きらり}耀と^{げい}剣が光るのは、^{ひい}羿(神話中の神)が九つの太陽を次々に射落とすかのよう、

^{ひらり}矯と舞い上がるのは、多数の仙人が^と竜とともに翔ぶかのよう。

公孫氏が現れ出るときは、雷がひとまず怒りを収めているかのような姿、

公孫氏が舞い終わった後は、静まり返った海にただ青い光が残るだけ。

いまでは公孫氏^{あか}の^{あか}絳い唇も、珠を飾った袖も虚しく消え、

その晩年に、弟子に^{かお}芸の芬芳を伝えたのだった。

弟子である^{りん}臨穎の^り美人[^{りじゅう}李十二娘]は、いま^{はくていじょう}白帝城[^{きふ}夔府にある]にいて、

この曲の舞いの^{ようよう}神髓を揚揚として見せてくれる。

私との問答でその^{まじ}妙技の由来が^し知れ、

時の流れ、事の変化に感じ入り、いよいよ心に傷ましく思う。

^{せんてい}先帝[^{げんそう}玄宗皇帝]には八千人の侍女がいて、

公孫氏の^{けん}剣器の舞いは初めから第一であった。

あれからの五十年間は^{てのひら}掌を返すかのよう、

王室は^{もくもく}風塵によって^{くら}湏洞と昏鎖され、

^り梨園の弟子は^{えん}烟のように散り散りになり、

^{がくこう}女性の^{がくこう}楽工たちの^{がくこう}残りの姿が、

冬の夕日のようにここにわずかに残っているのである。

^{きん}金粟堆[^{きん}玄宗皇帝の墓所]の南側の木はもう抱えるほどに太く成長し、

ここ^く瞿塘峡谷の古城には風が寂しく草を鳴らしている。

竹管の音が急に高まってそして終わり、
楽しさが極まったところで哀しみが来て、
東の空から月が出てきた。

ちうふ と ほ
老夫[杜甫]はこれからどこに往くのか、

我が足は旅の疲れで豆だらけ、

寂しい山のなかで愁いいたに疾むのである。

【補足】と ほ でのひら [杜甫が掌を返すように過ぎ去ったとここで歌っている 50 年間を我々はこれからじっくりと見て行く]

■ [02-王-01] 王維：題友人雲母障子

【解題】おう い あざな まきつ ここからは王維 [字は摩詰] の詩も合わせて読んで行く。この詩には、「時に年は十五」との添え書きがあり、最も若いときの作品として王維自身が特に残したものである。王維の生年は、699 年ないし 701 年であったとされ、どちらの説に従うかによって詩の編年が少し違って来る。ここでは 701 年説に準拠し、従ってこの詩は 715 年の作ということになる。

王維は蒲州ほしゅうに生まれ、知られている限りでは四代前から代々官職に就き、父の王処廉おうしよれんは官人として最終的に州の副知事クラスに至った。蒲州は通鑑 712-07 の冒頭にその地名を見ていて、長安ちやうあんの東方約 150 キロの中規模の都市である。母は名門さいの崔氏の出であるというから [細かくいうと崔氏にも幾つかの流れがある]、杜甫と概ね似たような出自で、やはり幼いころから詩文を学び、15 歳のころまでには恐らく何十篇という作品を作っていたであろう。この詩は友人が所有する雲母うんもで飾られた屏風に添えた作品。

【訳文】

君の家の雲母の屏風を、
我が家の庭に向けて開いてみた。
すると、山やら泉が勝手に飛び込んできた。
それは決して描いたものではなかったんだ。

【補足】〔王維がこの作品を残したのは特別な愛着があったからなのだろう。王維は15歳のときに家を離れて上京していて、この詩はきっと郷里を発つ直前に友人のために詠んだもので、郷里での唯一の作品としてこれを選び残したのだろう〕

■資治通鑑 卷211 [杜甫5歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫が5歳になった開元四年〔716年〕の記事を読む。

【訳文】

[716-10]玄宗皇帝は宦官を長江の南に派遣し、鷓鴣、鸚鵡などの鳥を取って来させて、宮中の庭園に置こうとした。使者は行く先々で煩擾を起こした。使者が汴州を通過したときに、倪若水は皇帝に申し上げた。「いまはちょうど農作業や蚕の飼育が非常に忙しくなっている時期であります。網で鳥を捕え、それを園池での遊びに供しようとおられ、遠くの川や山から、水路や陸路でそれを輸送し、上等の肉を鳥に食べさせています。道でそれを観る者は、陛下は人を賤しんで鳥を貴んでおられると思うであります。陛下は(天子として)鳳凰とて平凡な鳥、麒麟とて平凡な獣と見なすお方であります。まして鷓鴣、鸚鵡などを貴ぶべきなのでしょうか。皇帝は自分で手紙を書いて倪若水に謝り、絹を四十段与え、捕らえた鳥を放った。

【補足】〔これは一面ではすぐに倪若水の諫言を受け入れたことを記した美談ではあるのだが、一面では玄宗皇帝の本来的な性向を示すものでもある。皇帝のちよっとし

た楽しみを得るために派遣されて宦官が、皇帝の權威をもって人民を苦しめるということはいつの時代にもあったことで、玄宗皇帝にしても、銳意政務に勤しんでいたとされるその治世も初めにおいてすでにこのような問題を起こしていた]

【訳文】

[716-11]山東の蝗がまた大発生し、姚崇はまたこれを捕えるよう命じた。倪若水は意見を述べた。「蝗は天災であって、人の力の及ぶところではありません。徳を修めて、これを禳うべきであります。かつて劉聡のときに、蝗を常に捕えて埋めていましたが、(徳を修めなかったために)害はますます甚くなりました」。倪若水は朝廷からの指令を受け取るのを拒み、姚崇の指示に従わなかった。姚崇は倪若水に手紙を送った。「劉聡は似非君主であった。劉聡がいくら徳を修めたところで妖[蝗]に勝つ道理がない。今日は聖朝であって、そもそも妖はその徳に勝てるものではない。古の良い知事が治める土地には蝗はその境から入らなかったという。もしも徳を修めて蝗の害から逃れられるというのであれば、本来は無徳の者が見せかけだけの徳を修めようとしなはずがない[劉聡でさえ、それはうまく行かないとわかっていたので、蝗を懸命に捕えようとしたのだ]」。これによって倪若水は朝廷の命令に違反しなくなった。

夏、五月甲辰、朝廷は使者を派遣して、各州県で蝗を捕らえることに勤めた者と怠けた者の名を報告させた。これからも毎年のように蝗の害は発生したが、大飢饉に至ることはなかった。

【補足】[(1) 上に見た記事では皇帝に立派な意見を述べた倪若水も、ここでは合理主義者の姚崇にたしなめられている。倪若水の非合理的な考えは次のような思考から出てくる。皇帝は天からの負託を受け、人民の頂点に立って天下を治めている。その政治が乱れたときには、天は様々な警告を発し、彗星が現れたり、天災が生じたりする。天の警告を受けて、すばやく対応して政治を改めるなら、天下はまた静かに治まるようになる。倪若水は、蝗の害も天の警告と受け止めるべきで、蝗を捕らえて殺したと

ころで無駄で、政治の根本を改めなければならないと、ある意味、国政を批判したのである。(2) 倪若水が例として挙げた劉聡は、晋の時代に北方から異民族が続々と侵入してきた時代〔ご こ じゅうろくこく五胡十六国時代〕に一国の主となった人物。このときに異民族の侵入の一因は気候変動にあるともされ、蝗が大量に発生したのはその気候変動と戦乱が大きな要因であったらうから、劉聡個人の徳のあるなしに左右されるはずがない。姚崇は倪若水の論理に副うかたちで反論しているので、我々にとってはわかりにくい。徳のある知事が治める州には蝗が入らなかったという古代の伝説があり、倪若水が朝廷の命令を拒んだのは、己には徳があるから蝗はここには来ないと宣言するようのものであって、ある意味かなり傲慢であるのかもしれない]

【訳文】

[716-21]十一月己卯、黄門監の盧懷慎はにわかに疾が進み、上表して、宋璟、李傑、李朝隱、ろ じゅうがん盧從願を推薦し、「いずれも平和なときに大きな働きをする者たちです。かつて罪とされたのは小さなことで、棄てたままにしておくのは大きな損失です。どうか思し召しを垂れますように」。皇帝は深くその意見を受け入れた。

いつ び乙未、盧懷慎は亡くなった。家には何ら余財がなく、ただ一人の召使がいて、自分の持ち物を売って葬儀を行と言った。

【補足】〔「伴食宰相」の盧懷慎は実務は苦手でも人間としては重みがあった。最後に推薦した人物はいずれも朝廷から離れたところに置かれていた〕

【訳文】

[716-22]十一月丙申、尚書左丞の源乾曜を黄門侍郎同平章事にした。

ようすう姚崇は都に邸宅を持っていなかったの、もうきょくじ岡極寺に寓居して、せん疝を病んで休暇を願った。皇帝は、

使いの者を出して姚崇の飲食や起居のありさまを尋ね、一日にそれが数人から十人にもなった。^{げん}源乾曜が奏上したことが皇帝に心に適うと、皇帝は「これはきっと姚崇の謀ったことであろう」と、必ず言い、心に適わないと、「どうして姚崇と議論しないのか」と言った。源乾曜はいつも皇帝の言う通りであると応えた。大きな事柄があると、皇帝はいつも源乾曜に罔極寺に行行って姚崇に尋ねよと命じた。

癸卯、源乾曜は姚崇を(中書省に属する)四方館に遷して、家の者に看病させたいと願い出た。皇帝はそれを許した。姚崇は四方館には公文書が置かれているので、病人がゐるべきではないと固辞した。皇帝は、「四方館を設けたのは官吏のためである。そなたをそこに居させるのは国のためである。むしろ、そなたを禁中に置けないのが残念である。辞退してならぬ」と、言った。

姚崇の子の光祿少卿の姚彝、宗正少卿の姚異は多数の賓客と親しく、頻りに贈り物を受け取っていたので、人々は眉をひそめていた。(中書省の)主書である趙誨は姚崇の信任を得ていて、胡人[異国の]から賄賂を受け取っていた。事が発覚し、皇帝が自身で尋問したところ、獄に下され、死罪に相当するとされた。姚崇がそれを救おうとしたので、皇帝は姚崇のことを悦ばなくなった。たまたま都で赦が下り、趙誨の名もその中に加えられ、杖で百回打った上で嶺南に流した。姚崇はこれより憂懼し、宰相から退くことをしばしば請い、^{じょう}広州都督の宋璟を自分の代わりに推薦した。

十二月、皇帝は東都[洛陽]に行く前に、宋璟を刑部尚書西京留守にし、道を急いで都に来るよう内侍將軍の楊思勳を派遣してそれを迎えさせた。宋璟の風度は凝滞で、人間としての大きさは測り知れないものがあつた。都への道の途中では楊思勳と言葉を交えなかつた。楊思勳は皇帝から重用されている人物であつたから、帰還すると皇帝にそのことを訴えた。皇帝は嘆息し、ますます宋璟を重んじた。

【補足】〔(1) 盧懷慎の後に宰相になつた源乾曜も同じように姚崇の脇にいただけであつた。それだけ皇帝の信任が厚かつた姚崇であつたが、身内の者の不届きな行為によってにわかに風向きが代わつてしまつた。(2) 玄宗皇帝は新たな宰相として宋璟を起用した。宋璟は盧懷慎が推薦していた人物の一人で [一通鑑 716-21]、その名は通

鑑 712-07 でも見ている。太平公主たいへいこうしゅに嫌われて遥か南方こうしゆうの広州に出されていた]

【訳文】

[716-24] 閏十二月己亥、姚崇は宰相を罷めて開府儀同三司かいふぎどうさんしに、源乾曜は宰相を罷めて京兆尹けいちゆういん西京留守せいけいりゆうしゅに、刑部尚書けいぶしょうしよの宋璟が守吏部尚書兼黃門監しゅりぶしょうしよけんこうもんかんに、紫微侍郎しびじろうの蘇頲そていが同平章事どうへいしょうじになった。

宋璟は宰相になると、人を選ぶことに務め、その能力に応じて任務に授け、百官がそれぞれその職務にぴったり合うようにした。刑賞わたりについて私がなく、敢えて皇帝の顔を犯して正しく諫めた。皇帝は非常に敬憚けいたんし、意に合わないと思うところがあっても、曲げて宋璟の意見に従った。

突厥とつげつの默啜もくてつは武則天ぶそくてんのときから中国にとって患いとなり、朝廷は朝夕に悩まされ、天下の力を傾けても勝つことができなかった。郝靈荃かくれいせんはその首を得たので、世に抜きん出た功績を立てたと考えた。宋璟は、天子が武力による功績を好むと、事を好む者は皇帝の歡心を得ようと競うようになるのを恐れ、郝靈荃の褒賞をひどく抑え、年を越えてようやくろうしゆう郎将を授けただけであった。郝靈荃は慟哭し、ついには死んでしまった。

宋璟と蘇頲そしは互いの信頼が非常に厚かった。蘇頲は何か事があると宋璟に譲り、宋璟が事を論じると蘇頲がそれを助けた。宋璟はこのように人に語ったことがあった。「私は蘇氏父子とともに政務に就いた。父は大らかな人柄で、まことに国を担う器であった。一方で、息子[蘇頲]はよい策を献じ、よろしくない策を棄て、政務に精敏であることでその父を上回った」。

姚崇と宋璟が続いて宰相となり、姚崇は変に応じて務めを成し、宋璟は法を守って正しいことを貫いた。二人の志操は同じではなかったが、二人はともに皇帝と心を合わせて輔佐し、賦役ゆるを寛く公平にし、刑罰を簡明で正しく使い、民衆を豊かにしたのだった。唐の世の賢相といえ、前にたいそう（太宗皇帝のとき）に房玄齡ぼうげんれいと杜如晦とじょかいが並び称され、後に姚崇と宋璟が並び称され、ほかにそれに及ぶ者はいなかった。姚崇と宋璟が皇帝に前に行くたびに、皇帝は立って出迎え、去るときには軒の向こうに行くところま

で見送った。後に李林甫が宰相になったときには、姚崇や宋璟よりも寵任されたものの、礼をもって遇するという点においてははなはだ薄かった。

このとき紫微舎の高仲舒は遍く典籍に通じ、齊澣は実務に手慣れていた。姚崇と宋璟はその二人を近くに置いて、疑問点を問い尋ねた。そして歎じて、「古の事例を知ろうと思ったら高君に問え、今の事例を知ろうと思ったら齊君に問え。それによって政務に欠けるところはないであろう」

【補足】〔(1) 姚崇が引退して宋璟が宰相になった。玄宗皇帝はこの年、32歳で、姚崇は67歳、宋璟は54歳であった。若い皇帝を優れた年長者が補佐したのである。(2) この訳では省略したが、『資治通鑑』には突厥や吐蕃といった周辺の諸民族との関係について多くの記事がある。なかでも突厥の可汗〔遊牧民が使った王号〕の默啜は唐朝にとって長年の悩みの種であった。その默啜を討ったのであるから、郝靈荃は莫大な恩賞が与えられるはずと思ったのだが、宋璟はそうはしなかった。若い皇帝が軍事に関心を持ち、好戦的になることを警戒したのである。(3) 姚崇と宋璟の二人の宰相は玄宗皇帝の治世の最盛期、「開元の治」をもたらしたとして、太宗皇帝時代の「貞観の治」をもたらした房玄齡と杜如晦の二人とともに唐の時代の名宰相として讃えられた〕

■資治通鑑 卷211 [杜甫6歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫が6歳になった開元五年〔717年〕の記事を読む。

【訳文】

[717-06]玄宗皇帝はまだ太子になる以前から太常卿の姜皎と親しくしていた。竇懷貞等を誅殺したときに姜皎には功績があり、それからは寵遇されることで他の群臣は及ばなかった。常に臥内〔皇帝に私的な空間〕に出入り、后妃とも同じ榻に坐して宴飲し、数え切れないくらいの賜り物が与えられた。

その弟の姜晦^{きやうかい}は兄のお蔭で昇進し、吏部侍郎^{りぶじろう}にまでなった。宋璟は姜皎兄弟の寵遇が盛んすぎて、そのまま安んじられてはいないであろうことを申し上げ、皇帝もそうだと理解した。秋、七月庚子^{こうし}、姜晦を宗正卿^{そうせいけい}にし、次のように指示した。「前漢の高祖皇帝のもとで高貴になった諸将はその人生を全うできなかった。後漢の光武帝に親しかった者は閑職にあったことで生きながらえた。よって姜皎は宮中より放って田園^{さんかんくんほう}に帰し、散官勲封はもとのままとする」

【補足】[玄宗皇帝の治世が安定してくると、『資治通鑑』に記される事柄が少なくなる。ここでは宦官の姜皎の扱いが記されている。過度な寵遇を受けた者は最後を全うできないという事例を引いて、宋璟は姜皎を宮中から外に出すよう皇帝に助言した。宋璟は何も姜皎の身の上を心配してそのようにしたのではなくて、宦官の縁者が朝廷内で権限を持つようになるのを止めたかったのである]

■ [02-王-02] 王維：九月九日憶山東兄弟

【解題】王維は2年前の15歳のときに上京し、科挙を受けるための下準備、つまり人脈作りに勤しんでいた。この時代には、事前によりコネを作っておくと、科挙に合格し、かつよい官職を得るのに格段に有利になった。孟浩然^{もうこうねん}の親友の張子容^{ちやうしやう}は科挙には合格したものの、さほどよいコネがなかったからなのだろう、授けられたのは都から遠く離れた地方の町の警察署長クラスの職で、科挙合格者としては最低レベルであった。とはいえ、科挙に合格者していない中級、下級の官吏との間には普通には超えられないほどの差があった。

王維が都に出ると、あたかも少年アイドルがデビューしたかのように、たちまち上流階級の人々の寵児となった。詩文に優れ、音楽に通じ、書画の腕前も確かという美少年が忽然と現れれば、いやがうえにも注目される。王維のデビューをプロデュースするような人がいたのかどうかはわからないが、王維はモテモテで皇族たちの屋敷にも出

入りするようになった。王維のよいところは、有頂天になることなく天性の純真さを持ち続けていたことで、それがまた人々を引き付ける要因になったようだ。この詩には、そうした王維の心根のよさがよく出ている。17歳のときの9月9日の重陽ちやうようの節句に、故郷にいる兄弟を想って詠んだもの。詩の題にある「山東」は、上で見た蝗の害に遭った山東地方ちやうあんのことではなく、長安さんとうの東にある華山かざんの東側を指し、つまりは王維の郷里の方向を示す。

【訳文】

私ひとりか他所からの旅人として異なる土地にいる。

季節の祝い事が来るたびに親族への思いがいっそう強まる。

遥かに離れたここで想像する――

兄弟、従兄弟たちが揃って高いところに登り、

皆が髪しゅに茱萸ゆを挿して興じているなかに、

私一人が欠けているのだ。

【補足】〔(1) 重陽ちやうようの節句には、親しい人々が集って高いところに登り、厄除けしゅの茱萸ゆを髪しゅに挿し、菊の花を浮かべた酒を飲んで長寿を願った。茱萸は日本語でいう「グミ」ではなくハジカミで、重陽の節句のころに実が赤く熟す。(2) この詩は、他郷で重陽の節句を迎えた者が故郷を偲ぶ詩の典型として長く愛唱された。数えて17歳といえ、いまでいうと高校一年か二年である。当時の上流階級の人々が王維を絶賛したのも納得できるであろう。既成集団から認められるには、そこそこの大衆性と、十分に典雅であることを兼ね備えていることが必要条件であろう。後に見るように杜甫とほはそれとはまるで異なる詩風であり、また孟浩然もうこうねんも違っていた。王維こそが唐の最盛期における第一の詩人であると、同じ時代の人々は捉えていた〕

■ [02-孟-02] 孟浩然：岳陽樓

【**解題**】王維^{おうい}少年が都で大評判になっていたころ、都で孟浩然^{もうこうねん}の名を知るのはごく一部の人だけに留まっていた。科挙に合格した親友の張子容^{ちやうしやう}は、時に自身の詩を褒められることがあると、自分の郷里にはもっと優れた詩を作る者がいると言って、孟浩然の詩を見せていた。張子容の官界における履歴ははっきりとはわからないが、都から遠く離れた長江^{ちやうきやう}以南の地方の町をずっと転々としていたようである。地方官はおおむね3年で任期を終え、誰か強力に引き上げてくれる人がいれば都で官職に就けるが、そうでなければ少しばかり昇格して別の任地に移動するか、さもなければ職にあぶれてしまうこともあった。

この年、孟浩然は一つの決心をして旅に出た。目的地は、都とは正反対の南の岳州^{がくしゅう}であった。玄宗皇帝^{げんそう}が太平公主一派^{たいへいこうしゆ}を亡ぼしたときに重要な役割をした人物として張説^{ちやうえつ}がいた [→通鑑 713-02]。張説^{ちやうえつ}は姚崇^{ようしやう}が宰相になったために自身の立場が脅かされたと感じ、玄宗皇帝の弟である岐王^{きおう}の李範^{りはん}と親密になろうとして玄宗皇帝の不興を買い、地方に出されてしまった [→通鑑 713-30]。玄宗皇帝は張説を完全に見捨てたわけではなく、様子を見ていつか都に呼び戻すこともありうると考えていたようで、この前年の開元四年に、張説は前任地よりは格が上の岳州の知事になっていた。張説は武則天^{ぶそくてん}の時代から何度も左遷を経験していて、かつて遠く南方に流されたときに、その地にいた若い張九齡^{ちやうきゅうれい}の才をひと目で見抜き、都に送って科挙を受けさせたことがあった。張九齡は優秀な成績で合格し、その後、中堅官僚として活躍していた [→通鑑 713-2]。張説は官僚として優れた能力があっただけではなく、詩にも優れ、宮廷詩人としての面もあれば、新たなフロンティアの開拓者としての面もあり、どちらかといえば旧世代に属するであろう。

孟浩然^{ろくもんざん}には鹿門山に隠棲した昔の賢者への憧れがある一方で、一族のために官界に出なければならないとの思いが強くあった。張子容が官員としての下積みで苦勞しているのを見て、やはり中央との太いコネを持つことが肝要で、それを自分の実力で獲得しようと考えたのだろう、孟浩然是郷里の襄州^{じょうしゅう}から漢水の流れを下り、長江^{かんすい}に入って少し上流に遡って岳州^{ちようこう}に至り、張説の門を叩いた。岳州には天下に名高い岳陽楼^{がくようろう}があり、楼上から臨む洞庭湖^{どうていこ}は天下無比の絶景とされた。孟浩然是己の詩才の全てを注ぎ込んで岳陽楼からの眺望を詩に詠み、張説に献じた。このとき張説は51歳、孟浩然是29歳であった。

【訳文】

八月の湖水はあくまでも平らに広がり、
虚^{きょ}を含んで大空と一つになっている。
宇宙に充滿する気が雲夢の沢で蒸し上げられ、
洞庭湖^{どうていこ}の波が岳陽楼^{がくようろう}を揺り動かす。
ここを渡って行こうとしても舟楫^{ふなかじ}はなく、
聖天子の御代に端居^{はしじ}しているのを私は恥じる。
釣り糸を垂れる人をそぞろに見ては、
釣り上げられて世に顛れる魚を空しく羨むのだ。

【補足】 [この詩の前半は、岳陽楼^{がくようろう}からの眺望を詠んだ多数の詩の中で第一とされ、それを凌ぐ詩はこれより 51 年後に杜甫によって詠まれる。後半は、張説^{ちようせつ}によって引き上げられることへの期待を詠んでいる]

■ [02-孟03] 孟浩然：晚入南山

【**解説**】孟浩然^{もうこうねん}が張説^{ちやうえつ}に詩を献じた後に、二人の間でどのようなやりとりがあったのかわからないが、結果から見て、張説は孟浩然を官界に引き上げるべき人物であるとしては認めなかった。孟浩然是失意のうちに岳州^{がくしゅう}を去り、しばしそのあたりを旅したようである。これはそのころに詠んだと推測される詩。この詩の題は、『夜のうちに南山^{なんざん}に入った』。南山は潭州^{たんしゅう}にある岳麓山^{がくろくざん}で、孟浩然是岳州から洞庭湖^{どうていこ}を南に渡り、湖に流れ込む多数の川の一つである湘水^{しやうすい}を遡って岳麓山に向かったのである。

【訳文】

夜明けとともに、南方の湿り気を帯びた空気が^{もうもう}氤氳と湧き立ち、
南山^{なんざん}のあたりは果たして水であるのか雲であるのか。

いま初めて鯤^{こん}〔伝説上の巨大な鳥〕が飛び上がるのを見る〔湿気の湧きありさまをいう〕。

(湿気の毒^{あた}に中^おって)鳥が墮ちるのはかねてから聞いていた通りだ。

この地は長沙^{ちやうさ}〔潭州^{たんしゅう}〕のすぐ近く、

この江^{かわ}〔湘水^{しやうすい}〕は泊渚^{はくしよ}の中州で分けられている。

(漢^{かん}の時代の)賈誼^{かぎ}がかの屈原^{くつげん}を弔ったのはこのあたりだったのだろうか、

私もまたこの文〔屈原と賈誼の文〕を読んで心を痛ませるのである。

【**補足**】〔(1) 詩の前半は、「瘴気^{しやうき}〕について詠んでいる。瘴気は南方の暑く蒸された空気のこと、人や動物を害すると考えられていた。中華文明^{ちゅうが}は黄河流域の比較的乾燥した地域で始まったので、長江^{ちやうかう}以南の湿潤な気候風土は伝統的に好ましくならぬものとみされていた。孟浩然^{もうこうねん}が生まれ育った襄州^{じやうしゅう}は長安^{ちやうあん}のあたりと比べたらかなり湿潤で温暖であるけれど、潭州^{たんしゅう}あたりの山間部で濃い霧に包まれ、大自然の驚異を感じたのだろう。洞庭湖^{どうていこ}は流れ込む河川からの水量に応じて面積が大きく変化する湖でもあるので、水の持つ底知れぬ力の大きさを孟浩然是この旅でまざまざと知ったのだろう。

(2) 屈原は孟浩然より千年以上前の楚の国の人で、国政の立て直しに力を尽くしたのだが都を追放され、絶望して汨羅江に身を投じた。汨羅江は湘水と同じく洞庭湖に流れ込む川。賈誼はそれより 150 年ほど後の漢の時代の人で、国政の改革を様々に提案したのだがやはり都を追放され、潭州において、『屈原を弔う文』を作った。官界への道を開くことができなかつた孟浩然是、屈原や賈誼に思いを寄せたのであろう。ただし、孟浩然に屈原や賈誼のような政治家としての大きな抱負があつたのかというと、それを孟浩然の詩から読み取ることはできない]

■ [02-孟-04] 孟浩然：夜渡湘水

【解題】 同じ旅で湘水を夜に渡ったときの詩。

【訳文】

旅行く舟は、
航行に都合のよいいまの時を貪うように進み、
闇の中を、湘水を渡って行く。
湿った風に香るのは杜若であろうか、
歌う声はあるいは古の『采蓮の曲』なのだろうか。
船頭は岸辺の火を目印にして舟を着けようとし、
漁師は川の霧の中に宿ろうとしている。
舟に乗り合わせた人にくと尋ねる、
「潯陽というのはどのあたりでしょうか」

【補足】 [孟浩然はたぶん何人かの人々とともに船に乗り合わせたのだろう。最後の句で尋ねている潯陽は、実はかなり遠いところで、洞庭湖を出て長江を 300 キロほど

も下った鄱陽湖はようこの入り口にある。それで潯陽とあるのは誤りで別の地名だったはずだとする解釈もある。ここではあえて見当違いのところを人に尋ねたのがこの詩の面白いところであると理解したい。つまり、まだまだ旅を続けたいという思いを表しているのだろう]

■ [02-孟-05] 孟浩然：南還舟中寄袁太祝

【**解題**】孟浩然もうこうねんと張子容ちようしやう [→作品番号 02-孟-02] の共通の友人として袁瓘えんかんがいた。この詩の題にある袁太祝えんたいしゆく [太祝は官名] は袁瓘であって、なおかつ上で見た旅から帰ってくる途中、襄陽じやうように向かって漢水かんすいを遡りつつこの詩を詠んだという理解に基づいて、この詩をここで読んでおこう。

【訳文】

流れに逆らってさかのぼ 涙るのは嬉しいことではない。

風も波もあつたのでは、ひたすら辛苦を厭うだけだ。

このときに、狭い谷から鳥が飛び出し、

麗しい丘で春を歌っていると聞いた。

私は嶺北れいほく [湘水のあたり] から帆の向きを変えて帰ってきたところ、

巴東はとう [洞庭湖の北から襄陽の間を指す] において懐かしい友人に尋ねる——

「桃花源とうかげんはどこにあるのでしょうか」

旅行く者は、渡し場はどこかといま迷っている……。

【**補足**】 [(1) 三句目と四句目は、袁瓘えんかんが襄陽じやうようを出て都で官職を得たことを歌っているのだろう。(2) 「桃花源とうかげん」は陶淵明とうえんめいが描いたユートピア、桃源郷とうげんきやうともいう。道に迷った漁師がたまたま桃花源に入り込んだものの、一度そこから出るともう二度と行き

着くことはできなかった。孟浩然は一念發起ちようえつして張説に会いに行ったものの不発に終わり、自分の行き先はどこにあるのか見定められずにいる]

■資治通鑑卷212 [杜甫7歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫が7歳になった開元六年 [718年] の記事を読む。

【訳文】

[718-02] 春、正月、こうしゅう 広州の役人や民衆が(先に広州知事であった)宋璟のために遺愛碑を立てた。宋璟は皇帝に次のように申し上げた。「臣は広州にいたときに特別な功績はありませんでした。いま臣が高い位に就いたのもって、かの地の人々が諂へつらいを為そうとしているのです。このような風潮は改めたいと思っておりますので、臣から始めたいと考えます。禁じる御命令をお下しください」。皇帝はそれに従い、それからは他の州でも碑を立てないようになった。

【補足】[宋璟が宰相に抜擢される前には広州知事であったことは通鑑 716-22 で見ている。「遺愛碑」とは、慈愛に満ちた統治をしたのでいまもその愛が遺っているとして、先の統治者を讃えるものである。そのようなものを立てる習慣を宋璟は断とうとした。しかし、効果は一時的で、諂へつらいは後の世も連綿と続けられた]

【訳文】

[718-08] 夏、四月戊子、河南參軍の鄭銑と朱陽丞の郭仙舟が匱[皇帝への投書箱]に詩を投じて献じた。それに対して皇帝が下した敕に、「その文と内容を観るに、道教の法を崇ぶものであって、政治の用に役立つ適切なものではない。それぞれの好むところに従うがよいであろう」。二人とも官職を罷めさせて道士どうしとした。

【補足】[(1) 儒学をもって国を治めようとする人々は、実用性に欠ける道教や仏教

を排除しようとする。しかし、皇帝を初めとして富貴の者は往々にして道教や仏教に入れ込み、莫大な財を投じたり民衆を使役したりする。訳は省いたが、太平公主を亡ぼしてすぐのころに仏教を規制する策を打ち出していた。競って大きな仏教寺院を作っていたからである。ここで皇帝に献じられた詩に対してかなり強い処置をとったのは、皇帝が道教にのめり込むきっかけを作るまいとしたものであろう。あやしげな道士に惑わされ、不老長生の仙薬だとして猛毒を飲んでかえって寿命を短くしてしまった皇帝は多数いた]

■ [02-杜-04] 壮遊

【解題】杜甫がどのような少年時代を過ごしたのか、杜甫自身が折に触れて稀に漏らした言葉からわずかに知ることができる。作品番号 02-杜-03 で 4 歳とときの記憶を、作品番号 01-杜-01 で 7 歳から詩文を綴り始めたことを見ている。この項の表題に掲げたのは大暦元年 [766 年]、杜甫が 55 歳のときの作品で、壮年のころの思い出を詠んだ長い詩。その最初の部分で少年時代について回顧している。

【訳文】

昔むかし、十四、五歳のときに、

翰墨場[文才を競う社会]に出て遊ぶようになった。

学問の大先輩であった崔尚や魏啓心は、

私の詩文は(漢の時代の)班固や揚雄に似ていると言ってくれた。

学問を強く志したのは七歳ときで、

口を開けば鳳凰の詩を詠じていた。

九歳で大字を書き、

作ったものがふくら囊ふくらにいっぱいになった。

本性からして豪放で、すでに酒を嗜み、

悪に対しては、はらわた腸つよから剛にくく嫉んだ。

仲間の少年たちには目をくれず、

交わりを結ぶのは白髪がまじるような人ばかりであった。

飲んで酔いが回ると、

大地の果てまで見通しても、

俗物ともだけからようよしていると思うのだった。

.....

【補足】〔誇張はあるだろうけれど、杜甫はあまりお行儀のよろしくない意気盛んな少年であったのだろう。上流社会の人々に好かれた王維おういとはかなり異なるタイプの少年であったのは間違いない〕

■ [02-王-03] 王維：洛陽女兒行

【解題】おうい王維の評判は高まる一方で、人々の期待に応えるように、時代の好みに合う詩を作った。この詩の題は、『らくよう洛陽の若い娘の歌』。洛陽は現実に存在する当時の洛陽を指すというよりは、繁栄する都会の象徴で、そこで何不自由なく暮らす大金持ちの貴公子の若い妻のことを歌っている。王維は18歳であったから、若い女性に関心があっただろうし誘惑もあっただろうけれど、後のちの振る舞いから察するに、そちら方面についてはかなり堅い人物だったようである。

【訳文】

らくよう洛陽の若い娘さん、

向かいの門の内において、
 年はまだわずかに十五歳余りとか。
 夫が乗る青い馬は、たさんの宝玉で飾られ、
 侍女が具える料理は、金の皿に盛られた鯉の刺身。
 画をあしらった朱い^{あか}楼閣が並び、
 軒に連なって紅い桃が咲き、緑の柳が垂れる。
 娘さんが薄い^{とばり}幃の内側から出て来るのは、
 七種の香木で作られた車に乗って出かける夫を見送るとき。
 娘さんが豪華な扇を持って立つのは、
 九種の華をあしらった^{カーテン}帳の内に夫を迎えるとき。
 気ままな夫は若い盛りでしかも富貴、
 意気と^{きょうしゅ}驕奢は伝説の大富豪ものくほど、
 高価な珊瑚も惜しむことなく人に与えてしまう。
 妻をかわいがって手取り足取り自ら舞いを教え、
 春の窓辺に曙の明かるさが浮かびきたころになってようやく燈火を消す。
 燈火の残りの煙が花びらとなって窓辺に飛び、
 戯れが終わった後では、娘さんは何をするのものう、
 化粧を改めると、香の薫を^{かおり}焚き籠めてただ座っているだけ。
 町の中の知り合いといったら繁華を好む人ばかり、
 夫は日夜にあちらの家からこちらの家へと遊び歩くのである。
 そのような人々は、知ることもない、
 貧賤のあまり、川のほとりで日々洗濯に努める若い女性がいることなどは。

【補足】〔(1) 終わりのところで、貧乏な娘を哀れんでいる。川で洗濯する娘とは、

昔の伝説的な美女の西施せいしのイメージである。貧乏な家に生まれた西施は、その美しさを見出してくれた人がいたことで宮中に召された。それは、美点のある者は機会に恵まれるやたちまち大きく羽ばたいたという出世物語の一つの典型である。その後の西施は、敵国を亡ぼすための道具として使われ、数奇な運命に弄ばれた女性の悲劇の一つの典型である。同じころに、王維はこの詩の姉妹編として西施を主題にした詩を作っている。(2) 最後に西施をイメージする女性を持ち出すことで、少しばかり風刺の味付けをしているのだが、とってつけたような印象である。詩全体としては、豪華な暮らしを華麗な言葉遣いで詠むことに眼目が置かれていて、きっとそれが人々に歓迎されたのだろう。これより4年前に、玄宗皇帝げんそうは風俗が奢靡しやひに流れているのを戒める号令を出しているのだが [→通鑑 714-26]、それはすなわち上流階級の人々が贅沢ぜいさく三味の暮らしに強く憧れていたことを示すものであるのだろう]

■ [02-孟-06] 孟浩然：田園作

【**解題**】岳州がくしゅうへの旅 [→作品番号 02-孟-02] から帰った孟浩然もうこうねんは、己の詩の才能をもって官界への扉をこじ開けようと、このころに都のある人物にこの詩を送った。都との繋がりちやうしやうは親友の張子容ちやうしやうが作ってくれたと理解しておきたい [→作品番号 02-孟-03]。

【訳文】

粗末な私の住いは都会の塵と喧噪から離れたところにある。

先祖はここで素朴てんたんを恬淡てんたんとひたすら尚どうとんできた。

隣り合うのは古の隠者いんしやのような人々、

実の成る樹を十本ばかり植えて暮らしている。

このような田舎で時の流れに任せていたので、

三十になってもよい機会に巡り遇うことがない。

書と剣に明け暮れて、

田園の一日一日は終わる。

朝あさに起きて懐なつうことは多くあるのだが、

昼ひるに坐して悟さとるようなことはいつもわずかだ。

天あまに真直まことくに昇のぼる鴻鵠こうこくを羨うらやみつつ、

鶏とりや鶯あひると争まがって食べている。

宮中への門は望み見ることがかなわず、

薪きを採る道で労働歌を歌う。

郷里きょうりに私を知る人はなく、

朝廷てうていには貴君の他に親しい方はいない。

誰たれか揚雄ようゆう〔漢代の文人〕のような私のために、

『甘泉賦かんせんふ』を作つくって提出するよう勧めてはくれないだろうか。

【補足】〔(1) 前半では、南園なんえんでの日々の暮らしがスケッチされている。本来、孟浩然もうこうねんはそのような生活を愛する人で、後半で官界に出る手蔓てまきを懸命けんめいに求めているのは別人の作であるかのような印象を受ける。(2) 「書と剣に明け暮れ」とあり〔原文は「書劍時將晚しよけんときまさく」〔書劍時に將に晩れ〕、孟浩然は若いときに学問とともに劍の修練にも励んだ。他の詩から兄弟も同様であったことがわかるので、文武両道は家の伝統であった。想像をたくましくするなら、隋王朝ずいの末期から唐王朝とうが安定するまでの混乱の時代に、孟家は武器を手にして南園を守り抜いたのかもしれない。孟浩然是隱者に憧れ、実際に隱者になるとしてもそれは枯れた世捨て人ではなく、いつでも劍を持って立ち上がる気構えのある野武士のような人であったのだろう。(3) 終わりの部分は、揚雄ようゆうの故事を引いている。揚雄は漢代の人で、才能がありながら長らく貧窮をかこち、

30 歳を過ぎてからようやく人の推薦を得て世に知られるようになった。孟浩然は、揚雄が『甘泉賦』を皇帝に提出する機会を得てたちまち官職を授けられたという理解のもとでこの詩を詠んでいるようだが、史実はそれとは若干異なる。なお、杜甫も作品番号 02-杜-04 で揚雄の名を挙げているので、この時代の人は、優れた文才の持ち主というとすぐに揚雄を思い浮べたのだろう]

■ [02-孟-07] 孟浩然：書懷貽京邑故人

【解題】これも同じころに孟浩然が都の友人に送った詩。上の詩と同じ趣旨の作品で、前半と後半の落差がかなり小さくなっている。

【訳文】

我が先祖が孟子や孔子の故郷もうし こうしいたころから、
家は代々儒教を重んじ、
『詩経』や『礼記』を遺訓しきょう らいぎとして習い、
父から子へと窮まることなく伝えてきた。
私は昼も夜もつねに自らを励まし、
詩も文章もなかなか巧みになり、
三十歳で学も十分に成就したのだが、
運命というものは思い通りにならない。
恵み深い親は老いに向かいつつあり、
その年齢を思うと深い愁いのもととなる。
朝の膳には美味を載せられず、
夕餉にははしはば何もありません。

父母のためならいかなる労働も厭わないと言った孔子を慕い、
母の前では官に召されるのを取立て喜んでみせた毛公を懐^{もうこう おも}う。
意気通じ合う方からのお誘いがあれば必ず仕官するのがよく、
郷里で孤高を保っているべきではないのだろう。

世の大事なお仕事をされている皆様に訴えるのは
私を売り込むためだけではない。

我が郷土は都から遥かに離れてはいるが、

いつの日にか皆様とともに天下のために身を捧げたいのだ。

【補足】〔(1) 孟浩然^{もうこうねん}は、孟子^{もうし}と同じ姓であることから、先祖は孟子と同郷で、代々
儒学の古典を尊んできたと冒頭で歌っている。これはたぶん確たる事実ではないだろ
うけれども、家系的にも自分は官人となるのにふさわしいと主張しているのである。

(2) 後半は、年老いた親を持ち出したり、天下のために身を捧げたいといたりし
て、決して名利を求めるために官人になりたいと願っているのではないと強調してい
る。つまり、この詩は、作品番号 02-孟-06 では説得力に欠けると自身で気づいての改
良版であるのだろう。後に杜甫^{とほ}が官界に出ようと懸命にもがくのを見るようになるが、
そのときにこのころの孟浩然の詩を読み返していただきたい]

■資治通鑑卷212 [杜甫8歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫^{とほ}が8歳になった開元七年 [719年] の記事を読む。

【訳文】

[719-02]九月甲寅^{こういん そうおう りげん うつ}、宋王の李憲^{ねいおう}を徒して寧王^{げんそう}にした。玄宗皇帝はかつて複道^{ふくどう}[二階と二階を結ぶ
通路]から、衛士^{じゆうさつ}が食事を終えて余った食べ物を溝に棄てるのを見て怒り、杖殺[棒で打ち殺す刑]し

てしまおうと思った。皇帝の近くに仕える者は誰も敢えて意見を言おうとしなかった。そのとき李憲は穏やかに皇帝を諫めた。「陛下が複道の中から人の過ちを窺い見てこれを殺したならば、^{わたし}臣としては人々が安心していられなくなるのを恐れます。陛下が食べ物を地に棄てるのを憎まれるのは、そもそも食べ物が人を養うものであるからであります。いま食べ残しのために人を殺してしまうのでは、その根本を失ってしまうのではないですか」。皇帝は大いに悟り、はっと立ち上がって、「^{みだ}兄上がおられなかったら、濫りに刑を用いるところでありました」と、言って、すぐに衛士を釈放した。この日、皇帝は極めて楽しく宴飲し、自分の^{ぎよくたい}紅い玉帯を解いて、馬とともに李憲に与えた。

【補足】^{げんそう}〔玄宗皇帝の異母兄^{りけん}の李憲にまつわるエピソード。世襲制において兄弟はライバル関係になりやすく、当人同士よりも周囲の思惑によって兄弟間の仲が悪くなることも多い。玄宗皇帝についてはいずれの兄弟とも非常に仲がよかったというエピソードが多数残っている〕

■ [02-王-04] 王維：李陵詠

【^{げんそう}解題】玄宗皇帝の異母弟の一人に^{きおう}岐王の^{りはん}李範がいた [→通鑑 713-30]。李範は交友関係が広く、特に文人との交わりを好み、いつのころからか^{おうい}王維は頻繁にその屋敷や別荘に出入りするようになった。この年に19歳になった王維は、都で行われた科擧の地方試験を受験して首席で合格した。それにまつわる真偽不明のエピソードが伝えられている。

地方試験が間近に迫ってきていたとき、王維は李範に呼ばれた。行ってみると、錦繡の服が用意されていて、それに着替えるように言われ、ある^{こうしめ}公主〔皇帝の娘〕の屋敷に連れて行かれた。李範が先に奥へと通され公主と盃を交わす間、王維は控えて待った。李範は、「酒の肴に琵琶の新曲をお聞かせしたいが、いかがであろうか」と、公主に告げて王維を呼び入れた。王維は李範の指示に従い、最近作った曲を披露した。

公主は曲のすばらしさにも琴を奏でる王維の風姿の美しさにも心を打たれた。李範はわざと王維の名を明かさないうままに、「この者は詩も得意なのです」と言い、王維の詩巻を出した。公主は一目見て驚き、「これは日頃から私が誦しよして習っている詩ではありませんか。昔の人の佳き作よとっておりましたが、この若者が作ったのでしたか。これだけの才があるのですから、きっと科挙をお受けになるのでしょうか」。李範はうなずき、「この者は、困ったことに気位かいとうが高く、解頭かいとう〔首席合格者〕にならないのなら試験を受けないと申しているのです」と言って笑った。実は、公主はその年の解頭かいとうを張九臯ちやうきゆうこうという者にしよう試験の責任者に強く働きかけていて、それを李範は知っていたので敢えて王維を連れたのだった。「私にそのようなことを言われましても」と公主は笑って聞き流したが、李範が帰るとすぐに試験責任者を呼び付け、王維を解頭にせよと指示した。

この話が事実であったとしてもおかしくないほどに唐とうの時代の科挙は有力者の口利きが結果をかなり左右した。むろん実力が合格水準に全く達しなければ話にならないのだろうが、ある程度の下駄を履かせたり、順位を入れ替えたりするようなことはごく普通に行われていたようである。また、公主が王維の詩を習っていたとあるのは、王維の作品が上流階級の人々の好みに合うようなものであったことを示している。それは単に、公主が習っても差し障りのないような優美で上品な作品であるというだけではなく、やはり当時の時代精神を十分に映し出すようなものでもあったからなのだろう。

ここで読むのは漢かんの時代の武将である李陵りりやうを詠んだ詩。李陵は、日本では中島敦の小説『李陵』によってよく知られている。

【訳文】

漢の王朝に仕えた李將軍は、

三代続く將軍の家の子であった。

髪を結い上げる年になったころには勝れた策を考え、

年若くしてすでに壮士となった。

遠く駆けて国境の塞の人となり、

深く敵の単于[匈奴の王]の本拠地を目指した。

敵と味方の旗が向かい合い、

簫や鼓が悲しく響いた。

沙漠の果てで日が暮れても、

戦の声は湧き立つ砂塵の中で続いた。

李將軍が敵を撃滅せよと号令するのは、

皇帝に仕える者としての名を重んじるからである。

しかし、大軍の支援はなく、

ついには敵の穹廬に囚われの身となる恥を忍ばなければならなかった。

少年のころから漢朝の恩を蒙ってきた者として、

堪え難くはあっても、いつしか報いようと深く思っ、

なお死に身を投じることはしなかった。

同じときに匈奴に囚われた蘇武と会い、

我が心を知るのはこの人の他にはいないと思ったのだった。

【補足】[(1) 李陵は、匈奴の地に攻め入って苦戦する李広利を助けるために五千の歩兵を率いて出陣した。ところが、李広利と合流する前に、匈奴の単于が率いる本隊と遭遇し、単独で八日間にわたって奮戦したもののついに敗れて降伏した。漢の皇帝は、李陵が漢朝の機密を単于に洩らしているとの誤った情報を信じ、李陵の親族を処

刑した。一方で、同じころに匈奴に捕らえられた蘇武^{そぶ}は決して降伏することなく、沙漠の中で孤独の忠義を貫いていた。単于は李陵に蘇武を説得するよう命じたが、蘇武は応じなかった。後に、蘇武が釈放されて漢に帰るときに、李陵は会い、涙ながらに見送った。この詩の結びはそのときの心情を歌っている。(2) 李陵を詠んだこの詩から、このころの王維の詩風がよくわかる。歴史上の事柄を適切な言葉遣いで巧みに処理し、結びの句は余情を湛え、上流階級の人が見習うに足る出来栄えである。王維の詩は洒脱な都会風で、孟浩然の詩は流麗さに欠けて田舎の香りがする]

■ [02-孟-08] 孟浩然：和賈主簿弁九日登岷山

【**解題**】孟浩然^{もうこうねん}は都の人々に詩を送ったものの [→作品番号 02-孟-06、02-孟-07]、はかばかしい成果はなかったようだ。これは、9月9日の重陽^{ちやうよう}の節句に、襄陽^{じやうよう}で主簿^{しゅぼ}の職にある賈昇^{かしょう}とともに岷山^{けんざん}に登り、賈昇が詠んだ詩に応じて詠んだ作品。

詩の題の冒頭に「和」とあるのは、同じテーマで詩を詠んだという意味。もとの詩と同じ韻を踏んで応酬する「次韻^{じいん}」は、唐代の後半になってぼちぼち行われるようになり、孟浩然のころはそうした例は見られない。宋代になると、次韻^{そうだい}は社交の道具として非常に盛んになり、「和」は次韻とほぼ同じ意味で用いられることが多くなる。前に触れたように、武則天の時代に科挙の試験で詩の実作が課題として出題されるようになったことから、科挙を目指す者は必ず詩を学ぶようになり、詩の実作者が急激に増えた。詩は後に見る作品番号 02-王-06 がその典型であるように、貴人の求めに応じて作って献じるという風習がなお強く残っていたが、一方で、読書人の中に詩作に習熟した人が増えたことから、同レベルの仲間として詩を交換し合うことが盛んに行われるようになった。孟浩然はその点でも先駆的な役割を果たして、後に見るように、詩を通して多数の人々との繋がりを作って、自在に天下を動き回った。非常に単純化

していうと、詩の実作が科擧の課題となったことで、優れた詩を作れるということはすなわち国家にとって有用な人材であることの証となり、詩人は社会から尊敬される存在となったのである。極論すれば、最高の詩を作れる人は宰相になるべき人であるともいえるだろう。孟浩然はそのような気構えで詩を作ったのであって、作品番号02-孟-06で書と剣を同時に学んだと歌っていたことから、孟浩然にとって詩作はまさしく真剣勝負であったと想像してもよいのかもしれない。

岷山はすでに作品番号 01-孟-02 で見ているように、襄陽の町の東南九里にある山。さほど高くもないが、山頂からの眺めがすばらしく、襄陽を訪れてその絶景を見ずに去ってはならぬと言われた。とりわけ、孟浩然が憧れる龐徳公ほうとくこうより少しばかり後の時代に羊祜ようこが登ってから天下にその名が知れ渡った。羊祜は晋による天下統一の礎を築くために襄陽に来て、ある日のこと岷山の山頂に立つと、その顔がたちまち一変した。同行した鄒潤甫そうじゆんほが、「公の治徳ちとくは四海に冠たるものがございます。そればかりか、前哲の教つえを嗣いで学問の道も究めておられます。公の御名はこの山のように八方より望まれ、永遠に伝えられるでありましように、何故に、そのような御苦悶をお顔に浮かべておられるのでしょうか」と尋ねた。羊祜は答えた。「宇宙はいつからあるのだろうか。宇宙があったその最初からこの山はあったのだろうか。我等が決して知り得ぬ遠い昔より、数え切れぬ賢達勝士けんだつしょうしがここに登って、ここからの景色を遠望したであらう。我等の前には無限の時があり、無数の賢達勝士がいた。我等の後ろにも無限の時があり、無数の賢達勝士がいる。いまここで、その誰を見るのか。前の人を見ず、後ろの人を見ない。これを悲しまずにいられようか」。

【訳文】

(まわりに見える)望楚山ぼうそさんも万山まんざんもどこも同じ重陽ちゅうやうの日、

特にここで重陽の宴を催そうと人々が集まった。

皆様方にはそろって休暇を与えられ、

菊の花びらを浮かべた酒と一緒に酔おうとしている。

高い秋の空から、大いなる思いが生まれ、

落ち行く日差しから、歓びの情がさらに催される。

この地には貴君の詩に和せる者は少なく、

洛陽の才人に深く恥じなければならない。

【補足】〔(1) 賈昇かしょうを始めとする官人仲間の宴に、土地の名士として孟浩然もうこうねんも呼ばれたのだらう。(2) 「大いなる思い」の原文は「逸思いつし」、その内容はかの羊祜ようこの思索であろう。(3) 「洛陽の才人」とは、そのように褒めたたえられた漢の時代の賈誼かぎを指す。賈昇を同姓の賈誼になぞらえた社交辞令である。とはいえ、作品番号 02-孟-04 を思い起こすなら、賈誼のようにはなれずにいる孟浩然の苦い思いが託されているのかもしれない。(4) なお、賈昇はその後、少し南の荊州けいしゅうに移ることになり、同じ岷山けんざんで送別の宴が設けられ、孟浩然是詩を贈っている〕

■資治通鑑 卷212 [杜甫9歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫が9歳になった開元八年 [720年] の記事を読む。

【訳文】

[720-02] 春、正月、侍中の宋璟じちゅう そうけいは、罪を負いながら妄りに無実であると訴えてやまない者があまりにも多いのを嫌い、それら全てを御史台で取り調べさせ、中丞の李謹度ちゅうじゆう りきんどに、「処分に服してもはや訴え出ない者は獄より出し、訴え続ける者はすべて獄に繋いでおこうに」と言った。そのために宋璟を怨む者が多くなった。たまたま日照りが続いて早魃ゆうじんとなった。優人[役者]が戯れに早魃の神を皇帝の前で

次のように演じた。早魃の神に、「どうして出て来たのか」と、問うと、「宰相様の御処分に奉仕しようと思
いまして」。「それはどういことだ」。^{えんざい}「冤罪を負う者が三百人以上もおりまして、宰相様はことごとく獄に繋
いで抑えつけておられます。そうなりますと、私は出ないわけにはいかないのです[天災は失政をとがめ
るものであるからだ]」。皇帝は心の内でその通りだと思った。

そのとき、^{ちゆうしよ じ ろうどうへいしやう じ そ てい}宋璟は中書侍郎同平章事の蘇頲とともに悪銭[粗悪な銭]を厳禁することを発案した。悪
銭は^{わい が ちゆうこう}淮河と^{かんさつぎょ し しやういん し}長江の間で最も甚だしかった。宋璟は監察御史の蕭隱之を派遣して悪銭の現状を調査
させた。蕭隱之は厳格で性急であったために、各地で悲鳴が上がり、怨嗟の聲が満ちた。皇帝は蕭
隱之を左遷した。

^{しん し や かい ふ ぎ どうさん し れい ぶ しやうしよ けいちやういん げんけんよう}
辛巳、宋璟を宰相から罷めさせて開府儀同三司にして、蘇頲を礼部尚書にし、京兆尹の源乾曜を
^{こうもん じ ろう へいしやうちやう し ちやうかてい}
黄門侍郎にし、并州長史の張嘉貞を中書侍郎並びに同平章事とした。ここにおいて禁令が緩んで
悪銭がまた行われてしまった。

【補足】[ここには宰相の入れ替えが記されている。^{そうけい}宋璟は国政の規律を整えよう
と奮闘し、そのために多くの摩擦を生じた。訳は省略したが、有力者が人事に口をは
さむことを抑えようとしたために反発を買ってもいた。^{えんざい}冤罪に関連する事柄は、ここ
だけを読む宋璟の処置はひどいように思えるのだが、これも有力者のコネがあると、
ごね得になるというような実態があったのだろう。悪銭もまた、それによって利益を
得る者がやはり有力者と結びついて、宋璟を排除しようとしたという背景があったの
だろう。かくして^{げんけんよう}源乾曜 [→通鑑 716-22] が宰相に復帰したのである]

【訳文】

[720-11]十月、皇帝は諸王[皇帝の兄弟]が群臣と私的な結び付きをするのを禁じていた。^{こうろくしやう}光祿少
^{けい ふ ぼ とい はいきよ き おう りはん}卿駙馬都尉の裴虚己と岐王の李範は遊宴し、そのときに密かな相談事をした。^{ぼう し しん}戊子、裴虚己を新
^{しやう}州に流し、^{こうしゆ さいそう}公主[睿宗の娘]とは離縁させた。また、^{まんねん い りやうてい き たいしやく ちやうがく}万年尉の劉庭琦や太祝の張譔はしはば李範と

酒を飲み詩を賦していた。それで、劉庭琦^{がしゅうしこ}を雅州司戸^{さんじじょう}に張諤^{さんじじょう}を山荘丞^{さんじじょう}に左遷した。

しかし、皇帝が李範に対する態度は変わらなかった。皇帝は左右の者にこのように言った。「我等兄弟の間には何も無い。ただ、出世を競うような連中が無理やり取り付こうとしているのだ。私には兄弟たちを責める気は一切ない」

皇帝がかつて病気になることがあった。薛王^{せつおう}の李業^{りぎょう}の妻の弟である内直郎^{ないちよくろう}の韋賓^{いひん}と殿中監^{でんちゅうかん}の皇甫恂^{ほうふじゅん}が密かに皇帝の病状〔皇帝にもものことがあった場合のことも含む〕について話し合った。事が発覚し、韋賓^{じょうし}は杖死となり、皇甫恂^{きんしゅうし}は錦州刺史に左遷された。李業とその妻は恐れ入って処罰を待った。皇帝は階下に控える二人のところへと降り、李業の手を執って、「私にもも兄弟を疑う心があるのならば、天地は直ちに私の命を奪うであろう」と言って、すぐに宴飲を催し、李業を王位のままだに復し、その妻を慰め諭した。

【補足】〔玄宗皇帝には叔母の太平公主との死闘を経て権力を掌握した経験があるので、兄弟との関係が安定することに心砕いた。ここには李範^{りはん}と李業^{りぎょう}の二人の弟のことが記されている。裴虚己^{はいきょき}の肩書に「駙馬都尉」とあるのは皇帝の娘を妻としていることを示している。そうした恵まれた立場にありながら、何やらよからぬ相談事を李範に持ち掛けたのである。裴虚己は妻と離縁の上で左遷となった。一方で、韋賓^{いひん}は玄宗皇帝にもものことがあれば、姉の夫である李業が皇帝になる可能性もあると考えて、病状についてあれこれ詮索したのだろう。皇位を脅かすような言動は死罪である〕

■ [02-王-05] 王維：息夫人

【解題】王維^{おうい}が二十歳のときの詩。息夫人^{そくふじん}とは、春秋時代の息国^{そくこく}の君主の妻。息国は楚国によって滅ぼされ、息夫人は楚国に連れ去られ、楚王の妻となって子供も生んだものの、楚王とは口をきかなかつた。楚王がその訳を尋ねると、「私は一人の女として二人の夫に仕えることになってしまいました。死ぬことはできなかつたけれど、話

すことまでどうしていたしましたでしょうか」と答えた。また、この詩については次のような話が伝わっている。玄宗皇帝げんそうの兄の寧王ねいおうの李憲りけん [→通鑑 719-02] には寵愛する女性が多数いた。その邸宅ていの隣に餅 [小麦粉を焼いた食べた物] を売る者がいて、李憲はその妻を見て気に入り、夫に厚く酬へいいてその妻を自分のものにした。他の女を超えて李憲はその女を寵愛した。一年経ってから、「まだ元の夫を想うことがあるか」と尋ねた。女は何も答えなかった。李憲が元の夫を呼び入ると、女は見つめたまま両眼から涙が溢れて止まらなかった。居合わせた十人余りの客人たちも悲しい気持ちになると、李憲は皆に詩を詠むようにいった。そして王維が最初にこの詩を詠んだ。このエピソードがたとえ事実ではなかったとしても、王維が李憲を始めとして高貴な人々の邸宅に出入りしていたのは間違いないことであった。

【訳文】

いまは寵愛を受ける身ではあっても、

旧日の恩を忘れることはできない。

花を見ても眼に満ちるのは涙ばかり、

楚王そおうとは言葉を交わしはしない。

【補足】 [王維は貴人たちにちやほやされながらも、この詩に詠まれているような節操の堅さを具えていたようである]

■ [02-王-06] 王維：勅借岐王九成宮避暑応教

【解題】 玄宗皇帝げんそうの弟の岐王きおうの李範りはん [→通鑑 720-11] は、王維おういの最も有力なパトロンであった [→作品番号 02-王-03]。この詩の題の終わりにある「応教」の二字は、教きょう [諸王の命令] に応じて詩を作ったことを示す。古くから高貴な人の要望に応じて詩

を作ることは文人の大切な役割で、報酬を得たり地位を得たりすることに結びついた。これは、岐王の李範が皇帝の勅令を得て郊外にある九成宮きゅうせいきゅうを借りて避暑に行き、その際に王維も同行して詠んだ詩である。

【訳文】

帝子ていし〔皇帝の子〕は丹鳳闕たんほうけつ〔皇城〕に遠く別れを告げられた。

天書てんしょ〔皇帝の勅令〕によって遙かな翠微宮すいびきゅう〔九成宮〕をお借りしたのである。

(九成宮に到着すれば)窓を隔てた雲や霧が、

あたかも自分の衣の上から生じるように感じられ、

幔まくを巻き上げると、

山や泉があたかも鏡の中へと飛び込んでくる。

林の下の水音は賑やかに笑い語るかのように聞こえ、

巖いわの間にのぞく樹の色が窓格子に見え隠れする。

昔、ある仙人ふえは笙あおを吹きつつ碧い空に昇って行ったというが、

仙人の住まい勝るところがここにあるではないか。

【補足】〔「忘教」おうちょう〕の作は、気品よく優雅に作ることが求められ、その点でこの作品は上々の出来といつてよいのだろう。美しい字句を並べ、幾つかの故事を用い、九成宮きゅうせいを仙界の宮殿よりも結構なところだと讃えている。わかりにくい難しい言葉遣いはなく、訳文には表されていないが、対句も巧みかつ素直で、この作品を見た李範りはんを始めとするその場に居合わせた頭貴の方々は、二十歳の若者の見事な腕前に感心したであろう。ただし、我々にとってはあまり興味を引かない詩である。王維が李範の求めに応じた詩としては、楊氏ようしの別荘にお供したときや、衛氏えいしの邸宅での夜宴に同席のしたときのものなどがあるが、これ以上訳すことはしない。なおこの「自由訳」におい

ては、対句は対句らしく訳すような工夫は特にはしない。例えば、この詩にある、「隔窓雲霧生衣上、卷幔山泉入鏡中」の対句を、そのまま「窓を隔てて雲や霧が衣の上に生じ、幔を巻いて山や泉が鏡の中に入る」と対句のままに訳しても、我々には何に言っているのかさっぱりわからない。対句的な表現は日本語に基づく理解の仕方にはうまく馴染まないからであろう]

■ [02-孟-09] 孟浩然：晩春臥病寄張八

【解題】20歳の王維が都で皇族の屋敷に出入りしていたところに、32歳の孟浩然是郷里の襄陽で平穩ではあっても心中は複雑な日々を過ごしていた。春の終わりに病に臥せ、親友の張子容のことを思い、この詩を作って送った。後に見るように、張子容はこのころは長江下流部の江南にある常州にいたようである [→作品番号 02-孟-15]。

【訳文】

南側の道では春はまさしく終わろうとしているのに、
北側の窓辺でなほも病に臥せている。
しばらく近くの林にも行かないでいるので、
草も木もすっかり盛りになっているであろう。
細い径の先にあるあの花はもう終わってしまっただろうか、
庭では竹が淨らかに静かに揺れている。
翡翠の翼の鳥が蘭の花に戯れたり、
赤い鱗の魚が荷の柄を動かしたりしているだろうか。
いま思うのは、
昔馴染の友が、遠い川べりの地で政務に励んでいること。

互いに夢に思うことさえ、雲と山に阻まれている。

私は枕辺で感じるところに従って詠嘆ばかりしている。

何を感じ何を詠嘆するのか、

同じ志がありながら離れているのが残念でならないのだ。

俗世間に生きる人たちは、

自分のいかに世渡りをするばかりで、

知己を得ることが少ない。

(漢の時代の)賈誼は才能がありながら空しく一生を過ごし、

(晋の時代の)潘岳は望む地位を得られないままに鬢には半ば白いものが垂れた。

遙かな君を思う情を川に注いで東に流そう……、

日の影はたちまち西に駆け入って行く……。

常に恐れるのは、

羽を振って自在に飛びことができないままに溝に埋もれてしまうこと。

窮[困窮]と通[榮達]は運命によって定まっているのか、

そのことについて何かしらわかることがあるのだろうか。

【補足】〔(1) この詩には、張説や都の人々に送った先の詩と異なり、孟浩然の心の内が率直に詠まれている。(2) 志を得なかった人物として賈誼と潘岳を引いている。賈誼については作品番号02-孟-03や02-孟-08でも引いている。賈誼は気を病んで33歳で早世していて、孟浩然はすでに32歳になっていた。潘岳は文才があり、大変な美貌の持ち主で、都の女性たちの間でもてはやされたが、出世には恵まれなかった。ただ、詩文は確かに巧みではあったものの、その振る舞いは首をかしげるようなことも少なくなく、孟浩然が慕うに値する人であったかは疑問である〕

■ [02-孟-10] 孟浩然：愛州李少府見贈

【**解題**】^{じょうしゅう}襄州の役人である^り李姓の人から贈られた詩に応えた。詩の題の最初に「^{あい}愛州」とあるのは、かつて愛州に赴任していたことがあるからだ。「^{しょうふ}少府」とあるのは官職の名称で、州の警察署長のような役割を示すものであるが、地方官のうち知事ないしそれに次ぐような地位以外を大まかに指す語として用いられることが多いようだ。

【訳文】

門の内、軒の下に籠^{やまい}って疾を養っている。

もとより浩然^{こうぜん}の気こそは真に存在するはずだ。

天地のもととなる五行[水、火、金、木、土]のうちの火が禁じられているいま、

盛りに向かう春を見ようと十歩ばかり外に出てみた。

父母が植えてくれた桑と梓^{あずさ}は敬うべきであり、

また、客人を歓び迎える主人の心でもある。

とはいえ、見回してみても、いつても色褪せないものといったら、

青い松と翠^{みどり}の竹がある。

【**補足**】[(1) 李少府^{りしょうふ}は孟浩然^{もうこうねん}が病に臥せていると聞いて見舞い^{みまい}にきて、詩を贈ったのだろう。この詩はそれに応える内容になっている。(2) 「浩然^{こうぜん}の気^き」とは、もとほ孟子^{もうし}の著作にあつて、宇宙に充満する根源的なエネルギーのようなもの。「浩然^{こうぜん}の気^き」の存在を我が身の内に確かに感じられるならば、病は吹き飛ぶのである。(3) 冬至から105日目の寒食節^{かんしよくせつ}の前後は火を使った食事をとることが禁じられていた。この詩の中で「火が禁じられている」とあることから、寒食節に詠まれたことがわかる。寒食節が終わると清明節^{せいめいせつ}で、春の盛りとなる]

■ [02-孟-11] 孟浩然：李少府与楊九再来

【解題】李少府^{りしょうふ}は楊九^{ようきゅう}という人物を伴って再び見舞いにきた。この詩から、李少府はもとから孟浩然^{もうこうねん}と親しい関係にあった地元の人であるのではないかと推測されている。

【訳文】

弱歳^{じやくさい}[二十歳]で早くにも登竜門^{とうりゅうもん}を突破した貴君と、

幸いにもいままた会えるようになった。

春の月に揺れる柳もよいものだが、

寒い冬にも緑を保つ松を思うべきなのだろう。

寒食^{かんしょく}が終わり、あちこちに煙が立つのが見え、

曙の鐘にまぎって、笛の音が聞こえ、

道辺^{がやがや}では喧嘩と鶏を闘わせる遊びが始まっている。

春の行楽のとき、

友と遊びに行く人々を私は独り羨むのである。

【補足】[(1) 李少府^{りしょうふ}は二十歳の若さで科挙に合格して、何年ぶりかで郷里に戻ってきたのだろう。楊九は地元の人のもやほり昔馴染みののだろうか。(2) 寒食節^{かんしょくせつ}の次は清明節^{せいめいせつ}で、日本の春の彼岸から花見の時期のように、先祖に墓参りに行ったり、野外に行楽に出たりする。李少府は孟浩然を外に誘い出そうとして来たのだろう]

■ [02-孟-12] 孟浩然：清明日宴梅道士房

【解題】上の詩を同じときであるとは限らないが、清明節^{せいめいせつ}に梅道士^{ばいどうし}からの誘いを受けたとする詩。梅道士^{なんえん}は南園の近くに住んでいたのだろう。

【訳文】

林の下に臥しているうちに春の愁いも尽き、

窓を開くと、自然界の様々なものがすっかり新しくなっている。

そこに「青鳥の使い」[伝説の仙女の西王母は青い鳥を使者に立てた]がやってきて、

私を赤松子[伝説の仙人で、梅道士に喩える]の家に迎えたいという。

出掛けてみると、

金の竈[仙薬を作る竈]では寒食後の最初の火を付けたところ、

不老長生の実の成る桃の花がちょうど落ちかかってくる。

その桃があるなら、吾等はいつまでも童顔を保ってられるはずだから、

「流霞」[仙人の飲む酒]を傾けて徹底的に酔い続けるといふそうではないか。

【補足】[仙人に関連する用語をちりばめて洒落のめした詩。郷里の一風変わった人々との交流を詠んだこの種の詩が実は最も孟浩然らしいのだろう。とすれば、堅苦しい官職には不向きな人であったのだろう]

■ [02-孟-13] 孟浩然：尋梅道士張逸人

【解題】孟浩然が、上の詩で見た梅道士や、張逸人を尋ねた詩。張逸人は張姓の風変わりな人物で、後に見る張野人と同じであるのかもしれない。

【訳文】

梅道士のところの柳、

それはもとは彭沢先生[陶淵明]の住まいにあったものか。

張逸人のところの鶯鳥、

それはもとは山陰道士[王羲之に請われて金を積まれても愛鳥を売らなかった人]が飼っていたものか。

私は自分の好みに従って来るのであって、

杖を留めるところというと、漢陰[漢水のほとり]のこのあたりが多くなる。

二人とともに、魚の楽しみを覗かせてもらい、

柵を叩きながら歌うのを聞かせてもらおう。

(漢の末の隠者である)崔州平や徐元直の迹はまだ朽ちてはない、

千年にわたって清らかな波が変わらず立っているのだから。

【補足】[(1) 張逸人は漁をする人であったのだろう。漢水では築を仕掛ける漁が行われていた。孟浩然と梅道士は張逸人の舟に乗って、魚を獲る仕掛けを見せてもらったりして楽しんだのだろう。(2) 崔州平と徐元直は襄州ではよく知られた隠者で、諸葛亮の友人であった。つまり孟浩然が敬愛する龐徳公とほぼ同じ時期の人である]

■ [02-孟-14] 孟浩然：梅道士水亭

【解題】これは孟浩然が梅道士の住まいを訪ねた詩。題に「水亭」とあるので、水辺に住まいがあったのだろう。

【訳文】

臍曲がりの役人はそらの凡庸な雇われ人とは違っていた。

実は名士の出であって、いまは道家の人となっている。

水辺の隠れた住まいは見るのが難しく、

水は仙界と間近につながっているのだろう。

山は隠者を密やかに籠らせてくれるところ、

高い見地からの議論には、我らはなかなか応じられない。

再び来るときに迷ったならば、

花の下で漁師の舟に問うでしょう。

【補足】〔(1) この詩からすると、梅道士ばいどうしはもとは名士の出で、役人として勤めていた時期があったのだろう。(2) 最後の「花の下で漁師の舟に問う」とあるのは、陶淵明とうえんが描いた桃花源とうかげんのイメージである [→作品番号 02-孟-05]

■ [02-孟-15] 孟浩然：登岷亭寄晋陵張少府

【解題】この詩の制作年代は明らかではないが、岷山けんざんの頂上にある亭あずまやに登り、親友の張子容ちやうしやう [→作品番号 02-孟-01] のことを思って詠んだもの。題に「晋陵しんりやうの張少府ちやうしやう ふ」とあり、このとき張子容は晋陵じやうしやう [常州の別称] に赴任していた。

【訳文】

岷山けんざんの上の風ははなはだ急で、

雲が帆を広げて鳥のように飛び去って行く。

亭あずまやから身を乗り出し、

風の彼方あつちにいる君に問いかける。

「かの張翰ちやうかんのように故郷こきやうに帰ってくる気はないのかい」

【補足】〔最後は、張子容ちやうしやうと同姓の張翰ちやうかんの故事を引いたもの。張翰しんは晋の時代の人で、あるとき都みやこにいて秋風を感じると、故郷この呉まごもの地の菰じゆんさいの料理、蓴ろのスープ、鱸魚ぎよの刺身の味を出し、「我が思いのままに生きられずに、数千里も離れた地で官職につながれていられようか」と言って、さっさと帰郷してしまった。呉しんりやうは晋陵じやうに近く、襄州しやうに帰ってくるとなると張翰の動きとは方角的にはむしろ逆になる。なお、張翰は単に故郷の味が懐かしくて帰ったのではなく、朝廷内に異変が起ころのを察知してそれ

に巻き込まれるのを避けたのが真の理由だったようである]

■資治通鑑 卷 212 [杜甫 10 歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫が10歳になった開元九年 [721年] の記事を読む。

【訳文】

[721-04] 春、正月、監察御史の宇文融が、「天下の戸口 [戸籍簿に載っている家] で、逃げ移ってしまい、巧みに偽る者が非常に多数になっています。点検して総括しなければなりません」と、申し上げた。宇文融は宇文弼の玄孫で、源乾曜はもとからその才能を愛していたので、これに賛成した。

二月乙酉、しかるべき部署において、流れ移った者を元の地に戻し偽りを正すための法を議論して提案するよう勅命を下した。

【補足】 [(1) 唐といえは、律令制の国家で、法によって人民を管理し、成人男子に農地を与える代わりに兵役や租庸調を担わせた] と、我々は歴史の教科書で習うのだが、実際にどの程度まで制度通りに運用されていたのかはよくわかっていない。建国から100年も経つと、制度と実際面の乖離が露わになり、もはや立ち行かない状況になりつつあった。ここで取り上げられているのは、国家が把握できている戸数の減少である。唐の制度は人民に非常に重い負担を強いるもので、それが国家の基盤を支えていた。負担に耐え切れられなくなった者は制度の外へを逃げ出ようと、国から与えられた土地を棄ててどこかへと消え去ってしまう。人が消えると、兵役も租庸調も全てに支障が生じる。国家として大問題であるから、当然ながら朝廷は対策を講じなければならない。 [(2) 「宇文融は宇文弼の玄孫」と記しているのは、家柄を重視する価値観がこの当時の人々はもちろん歴史家にも強くしみついているからである。宇文融のような貴族や高級官僚は土地の私有が許され、兵役や租庸調の負担もなかった。土地を

棄てた人民はそうした私有地に流れた。つまり、宇文融の提案は国家のためにはなるものではあるけれど、自分たちの私的な利益には反するものであった。だから、朝廷の重臣たち、とりわけ家柄のよい者にとっては本気になって取り組みたい課題ではなかった。従って、上辺だけの対策が立てられ、偽りの成果が報告されるという結果になる]

【訳文】

[721-10]六月己卯、中都を罷め、また蒲州に戻した。

蒲州知事の陸象先の政事は寛大で簡明であることを尚び、役人や庶民が罪を犯しても、多くの場合に教え諭すだけで赦した。蒲州の録事の任にある者が陸象先に、「知事殿は罪人を鞭打つことをなさいませんが、それでは権威が示せないのではないのでしょうか」と、言った。陸象先は、「人の情は人によって大きく異なることはない。罪を犯した者であっても、私の言葉が理解できないわけではない。権威を示すために必ず鞭で打たなければならぬというのなら、まずそなたに対してから始めてみようか」と、言った。録事は慚じて退いた。陸象先は人によくこのように言っていた。「天下とは本来事なく治まるものなのだ。とかくつまらない連中が乱してしまう。源から清くするなら、よく治まらないことを憂う必要はないのだ」

【補足】[王維の郷里の蒲州が取り上げられている。最初に蒲州が一時期、中都とされていたのが元通りに蒲州になったと記されている。つまり重要な地域であるとする扱いから、普通の地域の扱いに変わったのである。次に、陸象先のエピソードが記される。儒学では、法によって人民を厳しく管理するよりも、徳によってゆるやかに治めるのを理想としたので、それを実践した陸象先のことを特に取り上げているのである。なお、訳では省いたけれど、先に太平公主が玄宗皇帝の廃位を企んだときに、陸象先は強く反対し、また、太平公主が亡んだ後で罪が及ぶ者が非常に多かったときに、陸象先は人知れず罪の小さな者を多数救っていた]

【訳文】

[721-15]九月癸亥、張説まがひ ちやうえつを兵部尚書同中書門下三品へいぶしょうしやうちゆうしゆもんかさんほんにした。

【補足】[長らく地方に出ていた張説 [→作品番号 02-孟-03] が宰相として中央に復帰した]

【訳文】

[721-22]十二月、著作郎の吳兢ちよさくろう ごきやう そくてんじつろく ぶそくてんが『則天実録』[武則天時代の記録]を編集した。その中に、宋璟そうけいが、魏元忠ぎげんちゆうの無実を明かすよう張説ちやうえつを励ましたと記してあった。張説は『則天実録』を宮中に修めるときにその部分を見て、吳兢がそのように書いたのだと知ると、偽って、「この件には劉知幾君は関係していなかったはずだが」と、吳兢に言った。吳兢は立ち上がり、「これは私が記したのです。確かな史実が残っています。亡くなった人に偽りをこじつけてはなりません」と、言った。そのやりとりを聞いた同僚は顔色を失った。その後、張説は数文字を改めることを吳兢に願った。吳兢はついにそれを許さず、「もしも貴公の要請に従ったならば、この史書は正しい記録とはならず、後世の信頼を得ることはできなくなります」と、言った。

【補足】[ここの記述はややわかりにくいだが、要するに、張説ちやうえつは史書を書き改めてほしいと吳兢に懇願したのである。それはこれより 18 年前の出来事で、張説はかろうじて踏みとどまって不正義に与することはなかったものの、あまり誇れるような振舞いではなかった。当時、武則天ぶそくてんによる統治が強権的性格を強め、ほとんどの者が唯々諾々と従うなかで、権威に屈することなく信念を貫いた人物として魏元忠ぎげんちゆうがいた。武則天の寵臣であった張易之ちやうえきしと張昌宗ちやうしやうそうの兄弟は魏元忠を敵視し、あらぬ罪をでっちあげて魏元忠を陥れようとした。そのときに、張易之兄弟は高位に就けることを約束して張説を証人として立てた。張説はそれに従って武則天の前で証言することになった

た。張説が証言する直前に、宋璟そうけいや劉知幾りゅうちきが正しいことを言うよう懸命に説得した。劉知幾は、「史書を汚して子孫の患いとなるようなことはするな」と言った。張説は土壇場で改心し、張易之兄弟に脅されてこの場に立たされたのであって、魏元忠について知るところはないと、武則天に告げた。審理の場は大混乱となり、結局、武則天は張易之兄弟に対して大甘であったために、張説が証言をひっくり返したことを問題視して張説は遠くに南方に流されてしまった。張説としては、堂々と張易之兄弟に不利な証言をしたと史書に書いてもらいたかったのだろうが、呉兢は事実をそのままを史書に残そうとしたのである。呉兢とのやりとりも含めて、張説は非の打ちどころのない君子というわけではなく、人間的にはなかなか癖のある面白い人である]

■ [02-王-07] 王維：送綦毋潜落第還鄉

【解題】この年の春、王維おういは科挙の最終試験に合格し、すぐに宮中で働く太楽丞たいがくじょうの職を得た。音楽に関わる職務である。科挙は筆記試験で、実際に官職を授けるかどうかは面接試験で判定され、そこでは唐朝の官人としてふさわしい振る舞いができるかどうか重視され、当然のことながら試験委員たちの主観に強く左右された。すでに上流階級の人々と親密な交流のあった王維は難なく面接試験を好成績で通過したのだろう、ただちに王維の才能に見合った職務を都において授かったのであった。その一方で、都で親しくなった綦毋潜きぶせん [字は孝通あざな こうつう] は筆記試験の段階で落第し、遠く南方の郷里けんしりゅう、虔州けんしゅうに帰ることになった。これは綦毋潜を見送った詩。綦毋潜はこの5年後に科挙もうこうけんに合格し、また孟浩然とも知り合いになる。

【訳文】

聖代せいだい[よく治まった時代]には野に隠れる者はなく、

英靈^{えいれい}〔優れた才能のある人物〕はことごとく朝廷に集まるという。
 そこで、東山^{とうざん}〔隠者のいる場所〕の客であった貴君もまた、
 いつまでも山で薇^{わらび}を採る暮らしを続けるのではなく、
 都に出て来てみたのだが、
 宮殿の門はなぜか遠くにあつて、
 己の選んだ道は誤っていたのだろうかと思わなければならなかった。
 いま季節は寒食^{かんしょく}のころ、
 都の人は春の晴れ着を盛んに用意している。
 長安^{ちやうあん}から始まる道に酒を置き、
 同じ心を抱きながらも私とは別れてしまう貴君を見送る。
 貴君はこの先は舟を浮かべて進み、
 間もなく、粗末な扉の前を掃除して住むようになるのだろう。
 旅行く人は遠く樹々の中に紛れ、
 夕日を浴びながら小さな村のあたりをゆくのだろう。
 貴君とともに活躍^{はかりごと}したいと思った私の謀^{はかりごと}が成り立たなかった。
 それでも、貴君を知る者はいないと落胆^{らくたん}しないでほしい。

【補足】〔科挙は新年の始めに行われ、春の盛りのときに、合格者と落第者との間には残酷なまでの差異が生じる。王維のこの詩は、合格者が落第者を見送る詩として最良の出来であるといえるだろう。なお、テキストによっては題に綦毋潜^{きぶせん}の文字がなく、他の人に他の時期に贈った詩であるとする説もある〕

■ [02-王-08] 王維：少年行

【解題】科挙に合格したころの王維はなかなか意気盛んであった。21歳というかな

り若い年齢で科挙に合格し、都で官職を得たのであるから、有頂天になって舞い上がっても少しもおかしくない。これは秦の時代の都の咸陽かんようでのこととして、将来に遠大な夢を描く若者の姿を歌っている。昔の時代に仮託するのは文学上の約束事で、杜甫とほの詩でもたびたび見るようになる。

【訳文】

其の一

新豊しんほう[銘酒の産地]の美酒は一斗が一万銭。

咸陽かんようには若い遊侠の士がごろごろしている。

逢ってたちまち意気投合、

「よし、君と飲むてはないかい」

と、柳に馬を繋いで、高楼に上る。

其二

俺は、手始めに羽林郎様うりんろう[皇帝直属の軍団の将軍]にお仕えし、

それから驃騎将軍ひょうきの遠征りょうように従って漁陽[北東の辺地]で戦うつもりさ。

国境での務めは苦しいだろうなだって、

あいつは勇ましかったと誰かが言ってくれさえすれば、

死なんてどうだっていいのさ。

其の三

俺は、二人分の力で大きな弓を引く。

敵の騎兵に千重に囲まれたところで、

そんなもの無に等しい。

金の鞍にまたがり、

白い矢羽を手にし、

ばたばたと五人の単于せんう[遊牧民の王]を殺してやるだけさ。

其の四

漢かんの朝廷で勝利を祝う宴が終わると、

戦功を論じる会議が開かれる。

天子がお出ましになって侯の位を授ける印をお渡しになる、

俺は、そいつを佩びて、將軍めいこうきやうとなって明光宮から出て行くのだ。

【補足】[領土拡張政策へと乗り出しつつあった当時の空気のなかで、戦場で手柄を立てて出世してみせると息巻く若者が実際にいたのだろう。王維おういにはそのような風潮に対して特段危惧するようなところはない]

■ [02-王-09] 王維：被出濟州

【解題】ここまで順風満帆で来た王維おういは思もよらぬ挫折を味わう。伝えられるところでは、芸達者な王維は、楽人たちのために「黄獅子」という舞を演じてみせたところ、それは皇帝しか舞ってはならないものであるとして咎められ、この年の秋、都落ちの身となってしまった。ニュースターの王維を好まない人もいて、あいつは調子に乗り過ぎているということになったのだろうか。王維さんとうは山東半島の濟州せいしゅうの司倉參軍しそうさんぐんという課長クラスの地位を与えられた。これは都を発ったときの詩。

【訳文】

小さな役回りの者は罰せられやすいのか、

私は濟水せいすいの南に左遷せいせんとなった。

執政の方々としては法をもって執行するまでであり、

賢明なる皇帝には私を罰しようとお心はないであろう。

我が行く先は――

村の入り口の門にまで川の湿り気が上ってくるし、

海からの雲によって井邑むら全体が深く覆われてしまうこともある……。

たとえ都に帰り来るときがあるとしても、

すでに鬢には白いものがまじるようになったのを憂えなくてはならないだろう。

【補足】 [初めて左遷を食らいさすがにショックだったのだろう、次に都に帰って行くころにはもう白髪になっているであろうかと嘆いている]

■ [02-王-10] 王維：登河北城樓作

【解題】 濟州せいしゅうに向かう途中、まだ旅の始まりに、黄河こうがの北側にある町で樓閣に登って詠んだ詩。

【訳文】

傳巖ふがんの上にある井邑むら、

旅の宿は霧の中。

高いところにある樓閣に登るとまだ落日が残り、

遙か彼方の水際に蒼い山あおが映る。

岸辺ともに灯った火は、そこに舟が宿るのであろうか、

漁師の家のあたりへと鳥が帰って行く。

ひっそり

寂寥として天地が暮れなずむにつれ、

大河とともに心が静かに広がりに行くのを覚える。

■ [02-王-11] 王維：宿鄭州

【解題】左遷の旅の半ばごろ、王維は洛陽らくようの東の鄭州ていしゅうに至り、この詩を詠んだ。

【訳文】

朝らくように洛陽の人々と別れ、夕ていに鄭の人の宿に入る。

親しい友のいない他郷、

独り私は僮僕どうぼく[少年の使用人]とだけ親しむ。

秋の雨に暗くとざされ、

あたりの町や村は見えない。

草むらの脇を農夫が家路につき、

村の子供は雨の中で牛を追っている。

宿の主人は東の丘にいて、

茅葺小屋のあたりを巡ってまだ忙しんでいる。

機はたを織るかのように虫が鳴き出し、

雀が稔りの時を迎えた畑でまだ騒いでいる。

昨日はなお金谷きんこくにいたけれど、明日は京水けいすいを渡る。

ここを去ってどこに行くのか、

わずかな禄ろくに引かれて遠いところで苦しもうというのだ。

■ [02-王-12] 王維：早入滎陽界

【解題】上の詩のすぐ後、朝早くに滎陽けいようとの境界に入ったときの作。王維おういは舟に乗つて滎水けいすいの流れを下り、黄河こうがにほど近い滎沢けいたくへと向かった。このあたりは川や運河が入り組んだ地域である。

【訳文】

舟うかを泛けいたくべて滎沢へと入った。

このあたりは昔から雄藩ゆうはん[重要な土地]として知られる滎陽けいようである。

黄河こうがの屈曲くつこくに押されて街並みは狭く、

夜明よあけけととも、川の中から盛んに火や烟けむりが立ち昇る。

人の振る舞いからこの地の風俗ふうぞくが窺うかがい知れ、

境を超えてから新たな方言べんごを聞く。

秋の平野へいよには田畑でんげの稔ねりが溢れ、

朝の光あさひかりが射すと、町の中まちなかが賑にぎやかになる。

波の上なみだの旅人りょじんに向かって魚いさなを商あう人が寄よってきて、

岸きしの傍そばらの村むらから鶏けいや犬いぬの声こゑがする。

我が旅たびの先さきは白しろい雲うみの向むかう、

ぼつんと上げた一つひとつの帆ふねに託たくす我が思おもい、

それはどのように述のべたらよよいのだらうか。

【補足】[旅に出たからの詩は、上流階級の人々に囲まれて都で詠んでいた詩とはかなり趣おもむきが異ちがなっている。すでに後半生おもういの王維の詩を知っている我々が見ると、左遷させんされたことで、本来そこに至るべきで詩境へとようやく歩み出したかのような印象を

覚える。王維は多才で、自己の個性を強く押し出すような人ではなかったので、往々にして人々の期待に応えることを、とりわけ若いときには優先してしまうところがあったのかもしれない。旅に出て一人になったときに、本来の王維らしさが静かに滲み出してきたのだろう。この詩の途中にある二つの対句は、まだ十分にはこなれていないようではあるが、明らかに新しい詩の世界を切り開こうとするものであろう。自然に包まれて暮らす人々のありさまを平易な言葉でさらりと描写して、煌びやかな語句をちりばめて人工的な美的世界を作り上げる旧来の詩のスタイルとはまるで違っている。王維は上流階級の人々に歓迎されて、旧来の宮廷詩人の一類型としてデビューしたのだが、この詩はむしろ後の宋代の詩に近い雰囲気さえある。二つの対句の原文と読み下し文を掲げておく]

秋野田疇盛、しゅう や でんちゅう さか [秋野に田疇は盛り]

朝光市井喧。ちようこう し せい かまびす [朝光に市井は喧し]

漁商波上客、ぎょしょう はじょう きやく [漁商 波上の客]

雞犬岸旁村。けいけん がんぼう むら [雞犬 岸旁の村]

■ [02・王-13] 王維：至滑州隔河望黎陽憶丁三寓

【解題】王維は濟州まであと少しの滑州にまできた。この詩の題は、『滑州に至り、こうが 黄河を隔てて向こうにれいよう 黎陽を望み、ていさんぐう 丁三寓のこと思った』。丁三寓はどのような人物であるのか不明で、このとき黄河の対岸の黎陽にいたのだろう。

【訳文】

こうが 黄河を隔ててこんもりとした桑林が見える。

あのあたりに黎陽れいようを巡る川があるのだろうか。

顧みると、いつしか遠くに来ていて、

かの山は雲の方に埋もれてしまっている。

懐かしい友人は見る事ができず、

川の水は変わらずに悠然と流れて行く。

頼もしいことに、

貴君の評判は遠くにまで及び、

旅行く道の途中でも時に耳にしたのだ。

【補足】おうい王維はたぶん複雑な人であるのだろう。都から追放されて絶望するかのよう
うでいて、この一連の旅の詩は、次第に平静さを取り戻している。剛直ではないけれど
意志が強固なのかもしれない。もしかしたら妙に鈍感だったするのだろうか。政治
上の抱負を積極的に述べたり、社会の矛盾を鋭く衝いたりはしないが、その点もうこうは孟浩
ねん然も同じで、とほ杜甫が数少ない例外なのかもしれない]

■ [02-孟-16] 孟浩然：晚泊潯陽望廬山

【解題】おうい王維が左遷の旅を余儀なくされた年、もうこうねん孟浩然もまた旅に出たようだ。孟浩然
これから数年の間に、じょうよう襄陽からかんすい漢水を下ってちやうこう長江に出て、その周辺を巡る旅に複数
回出たと推測されている。時期も目的も旅程もきちんとわかる史料はなく、さらにそ
の後にもっと大規模な旅もして、数多く残る旅の詩をいつのどの旅で詠んだのか
を定めるのは難しい。ここでは、劉文剛『孟浩然年譜』（1995年）に準拠して、そこ
に記載されている詩の編年に従いつつ、そこでは年代が定められていない詩は便宜的
なまとまりを作って読んで行くことにする。例えばこの表題に掲げた詩は『孟浩然
年譜』で 721 年の作であろうとされているので、じんよう潯陽の周辺で詠まれたほかの詩も仮

に一連の作品群と見なしてここで読むことにする。

この詩の題は、『夕方に潯陽に停泊して廬山を望んだ』というもの。潯陽は作品番号02-孟-05の詩で、遠く離れた見当違いの場所として尋ねていた。潯陽からは南方に廬山が望め、廬山は世界遺産に指定されている由緒ある名山である。

【訳文】

帆を掛けて幾千里もの旅をし、
 名山というようなものにはまだまだ逢えずにいる。
 ここに、舟を潯陽の城郭のもとに泊めたところで、
 初めて香爐峰を見る。
 かつて慧遠の伝記を読んでから、
 塵の世の外の事績を永く懐っていた。
 慧遠が住んだ東林の精舎は近いのだらう、
 日暮れの鐘が聞えて来る。

【補足】〔(1) 孟浩然にとって廬山は憧れの名山の一つであった。香爐峰はその中に一峰で、我々にとっては、「香爐峰の雪は簾を撥げて看みる」との白居易の詩に基づいて清少納言が簾を巻き上げたという『枕草子』の一節でなじみがある。(2) 慧遠は陶淵明と同じ時代の人で、若くして出家し、各地を巡る間に襄陽にいたときに、北から侵入してきた異民族の軍団に追われて南に逃げ、その後、廬山に入り、西林寺や東林寺に開いた。もともとは道教の靈山であった廬山にそれより仏教の道場が多数作られるようになった〕

■ [02-孟-17] 孟浩然：自潯陽泛舟經明海

【**解題**】^{もうこうねん}孟浩然^{じんよう}は^{はようこ}潯陽から舟で南の^{めいかい}鄱陽湖に入った。この詩の題にある明海は鄱陽湖を指すのだろう。鄱陽湖は面積が琵琶湖の5倍もある広大な湖である。

【**訳文**】

ここは広く盛んな水の郷、
^{ちやうこう}長江の大河はこれより上流^{さと}に向かって九つに分かれる。
船は水の利、風の利に乗って自在^{わた}に涉り、
あちこちを往来した末^{じんよう}に潯陽に至り、
さらには五つの湖に浮かび、
あるいは三つの川を巡る。
壮大な波を観ては昔の詩を思い、
^{げんすい}沅水や^{しやうすい}湘水のあたりでは^{くつげん}屈原を弔って痛み思う。

人として常に心は朝廷に在り、
朝廷から下される^{みことのり}詔を忘れはしない。
遥かに羨むのは、
^{きやうえん}宮苑の雁が、氷が融けたなら^と翔び^{かえ}回えること。

【**補足**】[最後の句には、官職に就こうとする思いが^{もうこうねん}孟浩然になお強くあることを示しているのだろう。雁は冬には^{きやうえん}宮苑にいて、夏には北に帰る。自分の居場所をきちんと持っている]

■ [02-孟-18] 孟浩然：下贛石

【**解題**】^{もうこうねん}孟浩然は^{はようこ}鄱陽湖を南に渡り、^{ちやうこう}長江の支流の^{かんこう}贛江を遡って^{けんしやう}虔州のあたりにまで行ったようである。そのあたりの贛江は天下に名高い急流で、この詩はそこを下つ

たときの印象を歌ったもの。

【訳文】

巨石の間を下ることこれより三百里、
 下をぐり、脇を巡る峰の数は一千。
 常にあたり一面から浩浩と水音が沸き立ち、
 渦巻く勢いは潺潺と絶えることがない。
 しづきが飛ぶのは竜が躍り出るのか、
 藤の蔓が顔を打つのか、はたまた猿が飛び来るのか。
 榜を取る人は、尖った岩が次々に迫り来るのに苦しみ、
 我々はもはや危険などということは忘れて、
 流れに乗る快さに思いを任せるしかない。
 船に乗ったなら心を長閑にすればよいのだ。
 暮れなずむ空のどこに帆を降ろすのかと船頭に問うと、
 「落星湾ですか」
 と、遙か彼方を指差すのだった。

■ [02-孟-19] 九日於竜沙作寄劉

【解題】贛江の沿岸に真っ白い砂が連なるところがあり、竜沙と呼ばれていた。そこで9月9日の重陽の節句を迎え、近くの予章にいる劉眷虚にこの詩を寄せた。

【訳文】

ここ竜沙は予章の北、

帆を掛けて過ぎ行くのは、
時ちやうようあたたかも重陽の節句。

季節の中にもこの地の風俗が見え、
この風光には情感を揺すぶられることが多い。

旅の空に、もしも誰かが酒を送ってくれるなら、
棹さおの音からも自ずと歌が生まれてくるであろう。

歌いつつ流れに乗って進み、
滔とうとう滔と夕波に任せて行くのだ。

【補足】[劉眷虚りゆうけんきょはこの翌々年に科挙に及第する人物で、その前から近隣では優秀な若者として知られていたのだろう。孟浩然もうこうねんはその名を聞いて、会ってみようとこの詩を送ったのだろう。詩は交友関係を広げる非常に有用な道具でもあった]

■ [02-孟-20] 孟浩然：早寒江上有懷

【解題】はようこ鄱陽湖に行った帰路かどうかは定かではないが、これは孟浩然もうこうねんが旅から郷里じやうりゆうの襄陽に向かつて帰るときの詩。冬の初めに長江ちやうこうを遡って行くのである。

【訳文】

木から葉が落ち、雁が南へと渡って行く。

北からの風に川の辺りは寒さを覚える。

我が家はじやうすい かんすい襄水[漢水]のほとり、

そ楚の地の上に浮かぶ雲の遙か端。

郷里を思う涙は旅の間に尽き果て、

天の涯を見つぽつんと帆を上げて進む。

船着き場はどこかと尋ねようとしても、
海のような水が夕暮れに遠く広がるのを見るだけだ。

■ [02-孟-21] 孟浩然：沂江至武昌

【解題】これも同じ旅の帰路かどうかはわからないが、長江ちょうこうを遡ぶって武昌ぶしょうのあたりまで戻ってきたときの詩。武昌はようこは鄱陽湖がくしゅうと岳州 [→作品番号 02-孟-03] の中間くらいのところにある。

【解題】

家はもとより洞湖どうこ [襄陽じょうようにある] のほどりにあり、
歳をまたがったの旅には、ひたすら帰る思いが催される。
旅人の心はただただ速く行くこととするのだが、
川を遡る路ははなはた行き悩むばかり。
凍っていた水は春の風によって解け始め、
新たな年がここに開け行く。
進むにつれた武昌ぶしょうの柳が見えてきて、
陽台ようだいの前に新緑が映えるであろう。

■ 資治通鑑 卷 212 [杜甫 11 歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫しじつぽんが 11 歳とほになった開元十年かいげん [722 年] の記事を読む。

【訳文】

[722-05] 夏、四月己亥、張説きがいを兼知朔方軍節度使ちやうまつ けん ち かくしやうぐんせつどしにした。

【補足】[張説は宰相のまま朔方軍節度使を兼務した。節度使とは、普通の州知事よりも強力な裁量権を与えられた地方官で、国境地帯に派遣された。朔方軍は、長安の北方の黄河が大きく北に張り出して屈曲しているあたりの行政区。そこで異民族との間に軍事衝突があつて難しい状況になっていたために、特に張説が選ばれたのだった]

【訳文】

[722-17](先に討伐した異民族の)康待賓の残党である康願子が唐に背き可汗[王]を自称していた。張説は軍を動かして追討して康願子を擒にし、その一党を平定した。河曲六州にいた胡人[異民族]の五万余りを許、汝、唐、鄧、仙、予などの州に移し、黄河の南から朔方の千里の地を空っぽにした。

これより先のこと、国境を守る戍兵はいつも六十万人余りだったが、張説はすでに唐に侵入してくる強敵はいなくなったとして、二十万余りをやめさせて農民に還すように奏上した。皇帝はそれに疑問を抱くと、張説は言った。「臣は長らく国境地帯にいましたのでその実情を詳しく知っております。將軍たちはただ自分の身を守るだけで、兵士を私的な用で使っております。敵を防ぎ、勝利を得るためなら、やたらとたくさん兵士を抱え、農務の妨げとなるようなことをする必要はありません。陛下がもしもお疑いになるのなら、臣は百人で国境の門を守ってみせましょう」。皇帝は張説が実際に勝利をしたのを見て、張説の提案に従った。

もともと各地に置かれた軍団の兵士は、成丁[21歳]から従軍し、六十歳で免じられた。その家は租税や雑役を免除されるわけではないので、家は次第に貧乏になり、ついには逃亡してしまうとその家は消滅する人々はそれほどまでに兵役に苦しんでいた。ここに張説は次のように建議した。「成人男子を召募して兵団に入れるようにしましょう。各種の雑役を免除し、制度として兵士を優遇するならば、逃亡したような者も争うように出てきて募集に応じるでしょう」。皇帝はこれに従い、十日ほどで十三万の兵士が集まり、各地の軍団に所属させて、交替で移動させた。兵士と農民の分離がこれより始まったのだった。

【補足】〔(1) 張説ちやうえつは宰相としてかなり大胆に腕を揮った。反乱の芽を完全に摘むために広大な朔方の地から異民族を一掃した。無理やり移された人々がすんなり収まればよいのだろうが。(2) 張説は兵制を大きく変えた。唐初からの律令制りつりやうせいに綻びが生じていたことは前に触れたが〔→通鑑 721-04〕、人民から強制的に兵士を徴発する仕組みはもはや立ち行かないまでになっていたので、張説は募兵制への転換を図った。ここではすぐに人が集まったと記されているが、募兵制による軍団の維持には当然のことながら莫大な費用がかかるので、国にとってそれが新たな大きな課題となる〕

■ [02-王-14] 王維：濟上四賢詠

【解題】濟州せいしゅうに左遷された王維は〔→作品番号 02-王-09〕その地で数年を過ごし、幾つかの詩を残している。それらの制作順ははっきりとはわかっていないので、数首を適当な順で読む。これは濟州に実在する4人の賢者について詠んだ詩。三首の内の二首を訳す。

【訳文】

其の一 崔録事さいりくじ

官の印を解いて故郷に帰った――

このお方さいりくじ〔崔録事〕はまことに賢人である。

若いときはかつて任侠にんきやうで聞こえ、

後に儒者として節義を守った。

世から東山とうざんの下〔退隱する場所の象徴〕へと逃れ、

滄海あおの隅せいしゅう〔濟州のこと〕に住むようになった。

すでに鳥も狎れるようになったと聞くので、

私も一緒に舟に乗って海を渡って行こう。

【補足】〔(1) 第一首では、官職から退いた崔録事さいろくじを取り上げている。録事は事務官のような職で、中央にも地方にも様々な部署に属する録事がある。(2) 「鳥も狎れるようになった」とあるのは、世俗的な欲のない者のところには鴟も近くにきて遊ぶという『列子』の寓話を踏まえている。任俠者から儒者にんきやうもの〔真面目な官員〕に転じた崔氏は、いまや無心になったというのである。(3) なお、濟州せいしゅうは内陸の町ではあるが、長安ちやうあんから見れば黄河下流部の海に近い町という印象になるのだろう〕

其の二 成文学せいぶんがく

宝玉を飾った剣を携え、華麗な衣をまとい、

豪華な邸宅ていたくに出入りしていた。

かの平原君へいげんくんのような人の客人となり、

家にはかの邯鄲かんたんの娼妓のような女性がいた。

公卿こうけいたちの集まりにおいても自由に意見を言い、

游侠ゆうきやうの場においても心のままに語らった。

しかし、年齢を重ねて志を得られずにいて、

病気だからと言って、

地方へと飛び出たのだった。

【補足】〔(1) タイトルにある「文学ぶんがく」は官名で、宮中であって書物の管理などをする。成氏せいは文学の職に就きつつ都ではかなり派手に暮らしていたのだろう。しかし、思うところがあって外に飛び出したのだった。(2) 豪華な邸宅ていたくに出入りしていたとあるのは、まるで都にいたときの王維おういのようである。かつての日々を思い返し、先人たちの生きざまを見つつ、自分の将来について思いを巡らせていたのだろう〕

■ [02-孟-22] 孟浩然：唐城館中早發寄楊使君

【解題】いつの作かは明らかではないが、孟浩然が襄陽の東方の地を旅したときの詩。陸路で帰り来て、随州に属する唐城で一泊し、翌朝早くに出た折に随州知事の楊氏にこの詩を寄せた。

【訳文】

霜を犯して暁に出発し、
唐城はすでに数里の向こう。
旅館にいたときから帰心に迫られ、
寂しい村路を行くと、さらに旅のわびしさが募ってくる。
貴君のためにこの詩を留め、
驢馬に鞭を打って道を急ぐ。
旅行くの人々の心細さを知るには、
空を遠く渡って行く雁の声を聴くのがよいだろう。

■ [02-孟-23] 孟浩然：夕次蔡陽館

【解題】上の詩の続きとは限らないが、唐城よりも少し襄陽に近い蔡陽の旅宿で詠んだ詩。

【訳文】

日が暮れゆくにつれて馬の脚が速まる。
さびれた町には住む人も稀だ。

道邊で人が歌うのを聴いたときには、
また楚の地に近いところにいると思ったのだが、
ここで宿に身を投じると、
たちまち家に帰ったような気分になる。
魯堰のお蔭でこの辺りには農地が広がり、
漢の時代の章陵の跡地の雰囲気はずかにある。
明日は母上に御挨拶をし、
かの老萊子の真似でもいたそうか。

【補足】〔(1) この詩の冒頭にある「日暮馬行疾、荒城人住稀」〔日暮れて馬の行くこと疾く、荒城に人の住むこと稀れなり〕の句を王維がよく吟唱していたという言い伝えがある。(2) 終わりの句は、老萊子は七十歳を超えても、子供の着る派手な衣をまとって母親を喜ばせたという故事を用いている〕

■資治通鑑巻212 [杜甫12歳]

【解題】『資治通鑑』から杜甫が12歳になった開元十一年〔723年〕の記事を読む。

【訳文】

〔723-09〕五月、皇帝は宮中に麗正書院を置き、そこに文学の士を集めた。秘書監の徐堅、会稽出身の太常博士の賀知章、鼓城出身の監察御史の趙冬曦等が、書物を修め、ときに皇帝に講義をした。張説が修書使となってそれを統率した。

麗正書院には手厚く物資が供給されたので、洛陽出身の中書舎人の陸堅は、このようなことはやたらと出費を増やすだけで国家には益がないので、すぐに止めるべきだと言った。張説は、「古から国家無事のときに帝王は宮殿を高く作ったり、声色を盛んに楽しんだりするばかりではありませんが、いまの陸

下だれは礼をもって文学の士、儒者を迎え、典籍を広めようと言われています。これは益するところが大きく、損じるところはわずかです。陸堅の言葉は物事がわかっておりません」と、申し上げた。これより皇帝は張説を重んじ、陸堅の意見を軽んじたのであった。

【補足】〔張説は文学を重んじ、自身も詩を得意とした。こうした面からも唐はこのころに隆盛期に達したのであった。なお、ここに会稽出身の賀知章の名があることに注意しておきたい。後に、唐の最隆盛期を象徴する人物として杜甫は賀知章のことを回顧し、後世の人々も唐の最盛期の風儀を具現化した人といえは賀知章を挙げるようになった〕

■ [02-王-15] 王維：和使君五郎西樓望遠思歸

【訳文】王維は引き続き濟州にいた。州知事が詠んだ『西樓より遠くを望んで帰るを思う』という詩に和した。詩の題にある「五郎」とは、知事が一族の同世代の中で五番目に年長であることを示す。知事の姓名は不明。

【訳文】

高く樓閣に登る。

思うところを見ようと、目を極めても、

情は十分に尽くされぬ。

枕の上でなら、

千里の向こうも見え、

家の窓から全ての部屋を覗くこともできる。

道を行く人は遥かに遥かに遠く、

日はぼんやりとかすみつつ、彼方の郊外を照らしている。

しんみりとした思いは川べりで窮まり、

ぼつんと雲が湧き立つ。

詩を賦す人[知事を指す]は優れた才能の持ち主、

帰りたい思いを同じくするのは低い地位おおいの者[王維]。

二人の故郷は見ることができず、

雲と水と空が一つになっている。

■ [02-孟-24] 孟浩然：送辛大不及

【解題】旅の間には出逢いもあり別れもある。孟浩然もうこうねんが旅の途中で詠んだ送別の詩を幾つか見ておこう。これは辛大しんだいを追いかけたものの会えなかったという詩。辛大は郷里の友人で、孟浩然には他にも辛大に贈った詩が幾つかある。なお、「大」は一族の同世代の中で最年長であることを示す。

【訳文】

貴君を見送ろうとして、会えない。

日が暮れ始め、独り愁いにまといつかれる。

川のほとりをぼつんと行きつ戻りつ、

心は天の涯で行き場を失い迷っている。

貴君はん どうは樊や鄧の町を経て、

嵩すう じょや汝の山や河へと入って行く。

昔から言われる通り、

車輪が遠ざかり行くと、

残された人は石の道にただ立ち尽くすのである。

【補足】[旅の途中で同郷の辛大しんだいに会い、もう一度会って見送ろうとしたところ行き違いちがひになったのだらう]

■ [02-孟-25] 孟浩然：江上別流人

【解題】これは黄鶴楼こうかくろうで友人と別れたときの詩。黄鶴楼は作品番号 02-孟-20 で見た武昌ぶ、現在の武漢しやうにあり、現在は 1985 年に再建されたものが観光名所となっている。昔、このあたりにあった酒店から酒好きの仙人が黄色い鶴にまたがって空に飛び去ったという伝説がある。孟浩然もうこうねんはたびたび黄鶴楼を訪れ、しばしばそこで人と別れた。題に「流人るにん」とあるから罪人として流されて行く人に贈った詩である。

【訳文】

郷里から離れてきた私は、
 謫居たくきょの身となった貴君に出逢った。
 ここ黄鶴楼こうかくろうで互いに飛び分れ、
 貴君ききんは蒼梧の野[遥か南方の地をいう]に流れ落ちて行く。
 この地からは、
 宿駅を繋いで走る使者は雲に乗るようにして急ぎ去り、
 旅の船は帆を上げて流れに沿ってたちまち下る。
 人が行き交う黄鶴楼で貴君と別れて、
 貴君の袂とを把ることが果たしてまたあるのだろうか。

■ [02-孟-26] 孟浩然：鸚鵡洲送王九之江左

【解題】この詩の題は、『鸚鵡洲おうむしゅうで王九おうきゅうが江左こうさに行くのを送る』。鸚鵡洲は黄鶴楼こうかくろうの

近くの中州。王九は王一家の同世代のなかで九番目の人、その名は王廻おうけいで、郷里の友人、白雲先生はくうんせんせいとも呼ばれる。孟浩然もうこうねんと同じく自由に生きようとした不思議な人物。江左ちやうこうとは長江の東側 [左は東を意味する]、つまり下流域のこと。

【訳文】

長江ちやうこうのほとりこうかくろうにある黄鶴楼、

そこに登るたびに、

江中こうちゆうにある鸚鵡洲おうむしゆうを遥かに見て好ましく思っていた。

中洲くねくねは逶迤あおとして、碧い流れさなからの勢い、

岸边えんおうには鴛鴦けいちゆうや鸕鶿あひがあふれるばかり。

日が中州の向こうに落ちて行くと、

砂浜はますます長くなって、

金色の光きんきさうが熠熠つぱいと颯さつのように動き回る。

舟人とまづなは錦の纜きんを牽いて舟を着け、

洗濯せんたくしていた娘たちは綺羅きらの裳スカートを束ねて帰る。

月が明るくなる時、蘆花あしかの花によってあたり全てが白くなり、

風が起かきこるとき、遥かに杜若かきつばたが香るのが知れる。

君子おうけい [王廻のこと]よ、またここに来ることを決して忘れないように。

【補足】 [(1) 鴛鴦えんおうや鸕鶿けいちゆうはオシドリに類した鳥。 (2) 「錦の纜」、にしき「綺羅の裳」きら スカートとあるのは、夕日のもとではそのように美しく見えるということであろう。 (2) この詩はもっぱら中州の美しさを歌い、別れの情は最後の一句にだけ詠まれている。

■ [02-孟-27] 孟浩然：送元公之鄂渚尋観主

【**解題**】これは鄂州がくしゅうに行く人を郷里じょうりの襄陽じょうようで見送った詩。鄂州ぶしゅうは武昌ぶしゅうの下流の町。詩の題にある元公げんこうはどのような人物であるのか不明。「観主かんしゅ」とあるのは鄂州にある道観どうかん [道教の寺院] の主あるじであろう。

【訳文】

桃の花みなぎが咲き、春の水が漲るいま、
 貴君は流れに乗って行ってしまふ。
 峴山けんざんの下で蛟浦こうほを離れると、
 たちまち長江ちやうかうの中で黄鶴こうかくの声を聞くであろう。
 青い竹の杖を貴君に贈って、
 蘋ひんの白い花が揺れる中洲で別れる。
 貴君はまさしく神仙の子、
 逢まみつ別れるも漫游まんゆうの旅のなかでのこと。

【**補足**】 [蛟浦こうほは漢水かんすいにある中州。昔、そこに蛇の化け物がいて人々に害をなしていた。あるとき襄陽じょうようの知事が剣を抜いて水に飛び込み、化け物と戦って退治した。それと黄鶴楼こうかくろうの伝説とを合わせて、全体として神仙のイメージで詩を構成している]

■資治通鑑 卷212 [杜甫 13歳]

【**解題**】『資治通鑑』から杜甫しじつがんとが13歳とほになった開元十二年 [724年] の記事を読む。

【訳文】

[724-17] 群臣ほうせんはしばしば封禪ほうぜんを行うよう上表したので、閏十一月丁卯うるう ていぼう、来年十一月十日たいざんに泰山でその儀式ちやうまつを行うと定めた。このときに封禪の議論を最初に起こしたのは張説ちやうせつであった。しかし、源乾曜げんけんようはそ

れをすることを望まなかった。それで張説と源乾曜の関係が難しくなった。

【補足】[封禪とは、天下が最もよく治まったときに、皇帝が天と地を祭る儀式で、それを行えるのは最高の統治者だけとされた。唐の時代になってからは、西暦 666 年に高宗皇帝が行っていた。耳目を引く施策を行いたがる張説は、先頭を切って封禪を行おうと提議した。いまや国家隆盛の時に当たり、大規模な式典を行って内外に大いに誇るべきだというのである。保守的な源乾曜は疑義を唱えたのだが、玄宗皇帝の派手好みの性格にぴたりと合致して、封禪の儀は実施されることになった。後世の歴史家の冷徹な目からすると、国家の隆盛期に身を置いてすっかりのぼせあがった皇帝が、有能ではあるがヨイショのうまい掎間的な大臣に乗せられて放蕩三昧をするという構図によって封禪の儀は行われるものと決まっている。玄宗皇帝はその中では最もましな方であったが、後に西暦 1008 年に宋の三代皇帝の真宗が、滑稽なまでにその構図そのままに封禪の儀を行ったことから、封禪の価値は大暴落したのだった]

■ [02-王-16] 王維：渡河到清河作

【解題】王維は引き続き濟州にいて、地方官としての職務に努めていた。これは、公用で黄河を渡って清河県に赴いたときの作品。

【訳文】

舟を大河の内に泛べる、

どこまでも水が積み上げられて、天の涯に至るかのようだ。

天の波がぱっと開けると、

千万家を有する町[対岸にある博州の聊城]が現れる。

さらに陸路を行くとまた町[清河県]があり、

こんもりとした桑畑に囲まれている。

振り返って郷里の方を見ようとすると、

ただ水が広く雲に連なっているだけだ。

【補足】[王維は舟で黄河を渡り、聊城からさらに北西に 100 キロほど進んで清河县に至った。郷里からも都からも遠く離れた地で日々を過ごしていることにふと違和感を覚え、この詩を詠んだのだろう]

■ [02-王-17] 王維：贈祖三詠

【解題】祖詠に贈った詩。祖詠は王維より 2 歳上で、この翌年の開元十三年に科挙に合格している。この詩は合格する前の祖詠の旅について触れているので、この年ないし前の年の秋に詠んだものであるのだろう。

【訳文】

開け放った窓に蠨蛸が巢を掛け、

前の階段で蟋蟀が鳴いている。

歳の終わりへと向かう冷やかな風が至り、

君子[祖詠]はどうしてようかと、ふと思う。

この地の官舎は人がいなくてひっそりとし、

人々から離れた我が住まいについては言うことさえできない。

寂しく門をびたりと閉ざし、落ち行く日が秋の草を照らしている。

近ごろ貴君からの音信があったとはいえ、

貴君がいるのは河や関に阻まれる千里の彼方。

先に汝水、潁水のあたりを旅し、

去年のうちに故郷らくよう[洛陽]に帰ったという。

貴君とは交わりを結んですでに二十年、

いまはともに心に適わずか一日さえも得ることができない。

貴君の貧病はすでに深く、

私との契闊ぶさたはもはや浅くはない。

仲秋に帰ることはできなかつたけれども、

暮秋にはと思っている。

だから良き再会まで幾日もないはずだと、

一日中ずっと思い続けているのである。

【補足】[詩のなかほどに置かれた対句、「閑門寂已閑、落日照秋草」[閑門寂として
已すでに閉ざし、落日らくじつ 秋草しゅうそうを照らす]は、王維の詩の特色をよく示している。王維が描
写する自然はおおむね澄明でひんやりとした印象を与える。それに対して、孟浩然もうこうねん
が描写する自然は人間界のざわめきと無縁ではなく温かみを帯びている]

■ [02-孟-28] 孟浩然：送告八從軍

【解題】襄陽じょうようの南園なんえんに住む農民である孟浩然もうこうねんが何を目的としてしばしば旅に出たのか、
旅費をどのように工面したのか、推測する手がかりさえないくらいに謎である。気ま
まに遊興の旅に出ているほど豊かな財産があったわけではないだろうし、商売のため
の旅であったとは考えにくいし、何らかの公務を帯びていたとするのはなおのこと
ないだろう。恐らくは、南園には厳しい現実があり、それを打開しようと努めるなか
で旅に出たのだろう。その推測のわずかな根拠となるかもしれない幾つかの詩がある。
郷里を離れて軍務に就く人々を見送った詩である。これは告八こくはちを見送った詩。告八は
告氏こくしの一族の同世代の八番目の男児。南園の近くに住む者であろうか。

【訳文】

男児には一片の意気があればよく、
 必ずしも五台の車に積み上げた書物を読まなくてもよい。
 貴君は勇を好むことでは私を超え、
 貴君は私を奮起させるほどに多才である。
 貴君が計略を巡らせる力は將軍の幕僚になれるだろうが、
 私は拙さを養って閑に暮らしているしかない。
 貴君が功名を遂げ、
 昔の偉人と同じように高位に昇った後に帰郷して来たなら、
 貴君のお供をしようと思う。

【補足】〔(1) この詩から想像を膨らませるなら、孟浩然と告八の間には同等の農民ではない何かしらの差異があったのだろう。孟浩然是農民としては裕福であり、そうではない告八は学問を学ぶチャンスがなく、兵役に従わなければならなかったのだろう。告八に比べて恵まれた立場にありながら、まだ何ら実績を挙げることでできていない孟浩然是、告八を見送るときに忸怩たる思いがあったのではないだろうか。(2) この詩の終わりで、漢の時代の疏広と疏受の故事を引いている。疏広とその甥の疏受は朝廷の高位に就くと、ただちに身を引いて二人そろって帰郷した。潔い身の処し方の手本として後世から仰がれた。孟浩然是想像の世界で告八の理想の未来を描いてみせたのである〕

■ [02-孟-29] 孟浩然：送莫氏外生兼諸昆季従馬入西軍

【解題】河西節度使のもとで軍務に就くことになった甥の莫氏とその兄弟を見送った

ときの詩。河西節度使とはシルクロードの東部、当時の唐の西端^{とう}の地を統治する任務を帯びた人で、軍政と民政の両方を掌握している。推測するに、孟浩然の姉妹ないしは従姉妹で莫氏に嫁いだ者がいて、夫が亡くなって暮らしが厳しくなり、息子が軍務に就くことになったのだろう。

【訳文】

思えば、君たちが『詩経』や『礼記』を習っていたとき、

我が家風と違ようなことは一度もなかった。

君たちは早くに一家の柱を失い。

ここに寂しく万里の向こうに行くことになった。

郷里で先祖に供え物をするのを取りやめて、

西方の地で陣地の張り方を学ぶのである。

今日は着飾って故郷を去り、

国境を守る司令部で作戦を練るのだ。

君たちは大空を飛^{おおとり}ぶ鴻鵠にまざる壮志を抱き、

兄弟を思う我が情^{こころ}は遙か向こうまで付いて行こうとする。

君たちが従うべきは武であるとともに文でもある。

戦わずして安寧をもたらすのが何よりもよいのだ。

【補足】〔^{ばくし}莫氏は本来は告八^{こくはち}よりは恵まれた境遇で学問の素養を身に付けていたのだろう。父が亡くなって暮らし向きが厳しくなり、何かしら手蔓^{かぜいせつどし}を得て、河西節度使のもとでたぶん事務官として雇われたのだろう〕

■ [02-孟-30] 孟浩然：送王宣從軍

【**解題**】王宣おうせんがどのような人物であるのか不明。唐とうが対外的に積極政策を取るようになってから、王維おういの『少年行』の詩〔→作品番号 02・王・08〕で見たように戦場でひと旗挙げようとする若者も実際にいたのだろう。王宣はそのような一人であったのかもしれない。

【訳文】

才ある貴君であるから、

幕中の士として戦場できつと勲いさおを挙げるはずだ。

武器を磨いて敵を滅ぼしたなら、

昔の王粲おうさんのように貴君は従軍詩を詠むであらう。

かくて、我が唐とうの軍旗は敵地から去り、

山川の地脈によって国境は正しく分けられるのだ。

励むがよい、

我が秘蔵の短剣を贈ろうではないか。

【**補足**】〔昔、王粲おうさんは曹操そうそうの遠征に従い、従軍詩を作った。王宣おうせんと同じ王姓の人の故事を引いて餞はなむけの詩としたのである〕

■ [02・孟・31] 孟浩然：送陳七赴西軍

【**解題**】これはこれより3年後の開元十五年〔727年〕の作であるようだ。後に『資治通鑑』の記事で読むように、その年の秋に西方から攻め込んで来た吐蕃とばんの軍勢によって唐軍は敗れ、朝廷は急ぎ十万の兵を動員して対処することになり、幾つかの州に緊急の徵兵令が発せられた。先の張説ちやうえつが募兵制に転換することを図ったことから、兵士になることで報酬が得られるのなら喜んで応じる者がいたはずで、この詩の題にあ

^{ちんしち}
陳七はそうした一人であったのだろうか。

【訳文】

目の前にころがる石ころの中に、

実は尋常ではなく優れたものがある。

貴君がそつだ。

貴君は遠く雄飛する「^{こうこく}鴻鵠の志」を抱きながらも、

書や剣を学ぶ少年時代には、

思うようにはいかなかった。

ここに国境地帯で^{のろし}狼煙が上がると、

若者たちは万里の向こうへ先を争って従軍しようとしている。

この私もまた都に赴こうと思っている——

貴君が凱旋するのを出迎えるために。

【補足】 [この詩の最後はいろいろな想像を誘う。後に見るように、^{もうこうねん}孟浩然是実際に
^{かいげん}開元十五年 [727年] の終わりに上京している。^{ちんしち}陳七の従軍と孟浩然の上京と関連性
があるのかどうかはわからないが、孟浩然是周囲の者が様々な事情によって軍務に就
くのを見て、もしも自分が官人になれば一族から兵士を出さなくてすむはずだと考え
たのはかなりの程度はありえるだろう。^{なんえん}南園を愛する孟浩然是、南園とそこの人々の
穏やかな生活を守るためには自分が官人になるのが最もよいと改めて考え、上京を決
心したのではないだろうか]

第2章 原文

■ [02-杜-01] 祭外祖祖母文

■ [02-杜-02] 唐故万年县君京兆杜氏墓誌

■ [02-杜-03] 觀公孫大娘弟子舞劍器行、并序

序

大曆二年十月十九日、夔府別駕元持宅、見臨穎李十二娘舞劍器、壯其蔚跂。問其所師、曰、余公孫大娘弟子也。開元三載、余尚童稚、記於郾城、觀公孫氏舞劍器渾脫、瀏漓頓挫、獨出冠時。自高頭宜春、梨園二伎坊內人、洎外供奉舞女、曉是舞者、聖文神武皇帝初、公孫一人而已。玉貌錦衣、況余白首、今茲弟子、亦匪盛顏。既弁其由來、知波瀾莫二。撫事慷慨、聊為劍器行。昔者吳人張旭、善草書書帖、數嘗於鄴郡見公孫大娘舞西河劍器、自此草書長進。豪蕩感激、即公孫可知矣。

昔有佳人公孫氏、一舞劍器動四方。

觀者如山色沮喪、天地為之久低昂。

燿如羿射九日落、矯如群帝驂龍翔。

來如雷霆收震怒、罷如江海凝青光。

絳脣珠袖兩寂寞、晚有弟子伝芬芳。

臨穎美人在白帝、妙舞此曲神揚揚。

與余問答既有以、感時撫事增惋傷。

先帝侍女八千人、公孫劍器初第一。
五十年間似反掌、風塵瀕洞昏王室。
梨園弟子散如烟、女樂余姿映寒日。
金粟堆南木已拱、瞿塘石城草蕭瑟。
玳筵急管曲復終、樂極哀來月東出。
老夫不知其所往、足繭荒山轉愁疾。

■ [02-杜-04] 壯遊

往昔十四五、出遊翰墨場。
斯文崔魏徒、以我似班揚。
七齡思即壯、開口詠鳳凰。
九齡書大字、有作成一囊。
性豪業嗜酒、嫉惡懷剛腸。
脫落小時輩、結交皆老蒼。
飲酣視八極、俗物都茫茫。
東下姑蘇台、已具浮海航。
到今有遺恨、不得窮扶桑。
王謝風流遠、闔閭丘墓荒。
劍池石壁仄、長洲芰荷香。
嵯峨閭門北、清廟映迴塘。
每趨吳太伯、撫事淚浪浪。
蒸魚聞匕首、除道哂要章。
枕戈憶勾踐、渡浙想秦皇。

越女天下白、鑑湖五月涼。
剡谿蘊秀異、欲罷不能忘。
歸帆扨天姥、中歲貢旧鄉。
氣劇屈賈壘、目短曹劉牆。
忤下考功第、独辞京尹堂。
放蕩齊趙間、裘馬頗清狂。
春歌叢台上、冬獵青丘旁。
呼鷹皂櫪林、逐獸雲雪岡。
射飛曾縱鞞、引臂落鵝鶩。
蘇侯挹鞍喜、忽如携葛彊。
快意八九年、西歸到咸陽。
許与必詞伯、賞遊實賢王。
曳裾置醴地、奏賦入明光。
天子廩食召、群公会軒裳。
脱身無所愛、痛飲信行藏。
黑貂寧免敝、斑鬢兀称觴。
杜曲晚耆旧、四郊多白楊。
坐深鄉党敬、日覺死生忙。
朱門任傾奪、赤族迭罹殃。
国馬竭粟豆、官雞輸稻粱。
拳隅見煩費、引古惜興亡。
河朔風塵起、岷山行幸長。
兩宮各警蹕、万里遙相望。

崆峒殺氣黑、少海旌旗黃。
禹功亦命子、涿鹿親戎行。
翠華擁吳岳、貔虎瞰豺狼。
爪牙一不中、胡兵更陸梁。
大軍載草草、凋瘵滿膏肓。
備員竊補袞、憂憤心飛揚。
上感九廟焚、下憫萬民瘡。
斯時伏青蒲、廷爭守御床。
君辱敢愛死、赫怒幸無傷。
聖哲體仁恕、宇鼎復小康。
哭廟灰燼中、鼻酸朝未央。
小臣議論絕、老病客殊方。
鬱鬱苦不展、羽翮困低昂。
秋風動哀壑、碧蕙捐微芳。
之推避賞從、漁父濯滄浪。
榮華敵勲業、歲暮有嚴霜。
吾觀鴟夷子、才格出尋常。
群兇逆未定、側佇英俊翔。

■ [02-王-01] 王維：題友人雲母障子

君家雲母障、持向野庭開。
自有山泉入、非因彩畫來。

■ [02-王-02] 王維：九月九日憶山東兄弟

独在異鄉為異客、每逢佳節倍思親。
遙知兄弟登高處、遍插茱萸少一人。

■ [02-王-03] 王維：洛陽女兒行

洛陽女兒對門居、纔可容顏十五余。
良人玉勒乘驄馬、侍女金盤繪鯉魚。
画閣朱樓盡相望、紅桃綠柳垂檐向。
羅幃送上七香車、宝扇迎歸九華帳。
狂夫富貴在青春、意氣驕奢劇季倫。
自憐碧玉親教舞、不惜珊瑚持與人。
春窓曙滅九微火、九微片片飛花璫。
戲罷曾無理曲時、妝成只是薰香坐。
城中相識盡繁華、日夜經過趙李家。
誰憐越女顏如玉、貧賤江頭自浣紗。

■ [02-王-04] 王維：李陵詠

漢家李將軍、三代將門子。
結髮有奇策、少年成壯士。
長驅塞上兒、深入單于壘。
旌旗列相向、簫鼓悲何已。
日暮沙漠陲、戰声烟塵裏。
將令驕虜滅、豈独名王侍。

既失大軍援、遂嬰穹廬恥。
少小蒙漢恩、何堪坐思此。
深衷欲有報、投軀未能死。
引領望子卿、非君誰相理。

■ [02-王-05] 王維：息夫人

莫以今時寵、難忘旧日恩。
看花滿眼淚、不共楚王言。

■ [02-王-06] 王維：勅借岐王九成宮避暑應教

帝子遠辭丹鳳闕、天書遙借翠微宮。
隔窓雲霧生衣上、卷幔山泉入鏡中。
林下水聲喧語笑、巖間樹色隱房櫳。
仙家未必能勝此、何事吹笙向碧空。

■ [02-王-07] 王維：送綦毋潛落第還鄉

聖代無隱者、英靈盡來歸。
遂令東山客、不得顧采薇。
既至君門遠、孰云吾道非。
江淮度寒食、京洛縫春衣。
置酒臨長道、同心与我違。
行當浮桂櫂、未幾挹荆扉。
遠樹帶行客、孤村當落暉。

吾謀適不用、勿謂知音稀。

■ [02-王-08] 王維:少年行

其一

新豐美酒斗十千、咸陽遊俠多少年。
相逢意氣為君飲、繫馬高樓垂柳邊。

其二

出身仕漢羽林郎、初隨驃騎戰漁陽。
孰知不向邊庭苦、縱死猶聞俠骨香。

其三

一身能擘兩雕弧、虜騎千重只似無。
偏坐金鞍調白羽、紛紛射殺五單于。

其四

漢家君臣歡宴終、高議雲台論戰功。
天子臨軒賜侯印、將軍佩出明光宮。

■ [02-王-09] 王維:被出濟州

微官易得罪、謫去濟川陰。
執政方持法、明君無此心。
閭闔河潤上、井邑海雲深。

縱有歸來日、多愁年鬢侵。

■ [02-王-10] 王維：登河北城樓作

井邑傳巖上、客亭雲霧間。
高城眺落日、極浦映蒼山。
岸火孤舟宿、漁家夕鳥還。
寂寥天地暮、心与広川閑。

■ [02-王-11] 王維：宿鄭州

朝与周人辞、暮投鄭人宿。
他郷絶儔侶、孤客親僮僕。
宛洛望不見、秋霖晦平陸。
田父草際歸、村童雨中牧。
主人東臯上、時稼遠茅屋。
虫思機杼鳴、雀喧禾黍熟。
明当渡京水、昨晚猶金谷。
此去欲何言、窮辺徇微祿。

■ [02-王-12] 王維：早入滎陽界

泛舟入滎沢、茲邑乃雄藩。
河曲閭閻隘、川中烟火繁。
因人見風俗、入境聞方言。
秋野田疇盛、朝光市井喧。

漁商波上客、雞犬岸旁村。
前路白雲外、孤帆安可論。

■ [02-王-13] 王維：至滑州隔河望黎陽憶丁三寓

隔河見桑柘、藹藹黎陽川。
望望行漸遠、孤峰沒雲煙。
故人不可見、河水復悠然。
賴有政聲遠、時聞行路傳。

■ [02-王-14] 王維：濟上四賢詠

其一 崔錄事

解印歸田里、賢哉此丈夫。
少年曾任俠、晚節更為儒。
遯世東山下、因家滄海隅。
已聞能狎鳥、余欲共乘桴。

其二 成文學

寶劍千金裝、登君白玉堂。
身為平原客、家有邯鄲娼。
使氣公卿坐、論心游俠場。
中年不得志、謝病客遊梁。

其三 鄭霍二山人

翩翩繁華子、多出金張門。
幸有先人業、早蒙明主恩。
童年且未學、肉食驚華軒。
豈乏中林士、無人獻至尊。
鄭公老泉石、霍子安丘樊。
壳藥不二價、著書盈萬言。
息陰無惡木、飲水必清源。
吾賤不及議、斯人竟誰論。

■ [02-王-15] 王維：和使君五郎西樓望遠思歸

高樓望所思、目極情未畢。
枕上見千里、窓中窺萬室。
悠悠長路人、曖曖遠郊日。
惆悵極浦外、迢遞孤烟出。
能賦屬上才、思歸同下秩。
故鄉不可見、雲水空如一。

■ [02-王-16] 王維：渡河到清河作

泛舟大河裏、積水窮天涯。
天波忽開拆、郡邑千萬家。
行復見城市、宛然有桑麻。
回瞻舊鄉園、淼漫連雲霞。

■ [02-王-17] 王維：贈祖三詠

蠨蛸挂虛牖、蟋蟀鳴前除。
歲晏涼風至、君子復何如。
高館閑無人、離居不可道。
閑門寂已閉、落日照秋草。
雖有近音信、千里阻河關。
中復客汝潁、去年歸旧山。
結交二十載、不得一日展。
貧病子既深、契闊余不淺。
仲秋雖未歸、暮秋以為期。
良會詎幾日、終日長相思。

■ [02-孟-01] 孟浩然：尋白鶴巖張子容顏處士

白鶴青巖半、幽人有隱居。
階庭空水石、井壑罷樵漁。
歲月老青松、風霜苦竹疏。
睹茲懷旧業、廻策返吾廬。

■ [02-孟-02] 孟浩然：岳陽樓

八月湖水平、含虛混太清。
氣蒸雲夢沢、波動岳陽樓。
欲濟無舟楫、端居恥聖明。
坐觀垂釣者、空有羨魚情。

■ [02-孟-03] 孟浩然：晚入南山

瘴氣曉氛氳、南山復水雲。

鯤飛今始見、鳥墮旧來聞。

地接長沙近、江從泊渚分。

賈生曾弔屈、予亦痛斯文。

■ [02-孟-04] 孟浩然：夜渡湘水

客舟貪利涉、闇裏渡湘水。

露氣芳聞社、歌聲識采蓮。

榜人投岸火、漁子宿潭烟。

行侶時相問、潯陽何處邊。

■ [02-孟-05] 孟浩然：南還舟中寄袁太祝

沿泝非便習、風波厭苦辛。

忽聞遷谷鳥、來報五陵春。

嶺北回征帆、巴東問故人。

桃源何處是、遊子正迷津。

■ [02-孟-06] 孟浩然：田園作

弊廬隔塵喧、唯先尚恬素。

卜隣近三徑、植果盈十樹。

粵余任推遷、三十猶未遇。

書劍時將晚、丘園日已暮。
晨興日多懷、昼坐常寡悟。
冲天羨鴻鵠、爭食嗟鷄鶩。
望斷金馬門、勞歌採樵路。
鄉曲無知己、朝端乏親故。
誰能為揚雄、一薦甘泉賦。

■ [02-孟-07] 孟浩然：書懷貽京邑故人

唯先自鄒魯、家世重儒風。
詩禮襲遺訓、趨庭露未窮。
晝夜恒自強、詞翰頗亦巧。
三十既成立、吁嗟命不通。
慈親向羸老、喜懼在深衷。
甘脆朝不足、簞瓢夕屢空。
執鞭慕夫子、捧檄懷毛公。
感激遂彈冠、安能守固窮。
當途訴知己、投刺匪求蒙。
秦楚邈離異、翻飛何日同。

■ [02-孟-08] 孟浩然：和賈主簿弁九日登峴山

楚乃重陽日、群公賞燕來。
共乘休沐暇、同醉菊花杯。
逸思高秋發、歡情落景催。

国人咸寡和、遥愧洛陽才。

■ [02-孟-09] 孟浩然：晚春臥病寄張八

南陌春將暮、北窓猶臥病。

林園久不游、果木一何盛。

狹徑花將盡、閑庭竹掃淨。

翠羽戲蘭苕、頰鱗動荷柄。

念我平生好、江鄉遠從政。

雲山阻夢思、衾枕勞歌詠。

歌詠復何為、同心恨別離。

世途皆自媚、流俗寡相知。

賈誼才空逸、安仁鬢欲垂。

遥情每東注、奔晷復西馳。

常恐填溝壑、無由振羽儀。

窮通若有命、欲向論中推。

■ [02-孟-10] 孟浩然：愛州李少府見贈

養疾衡簷下、由來浩氣真。

五行將禁火、十步任尋春。

致敬唯桑梓、邀歡即主人。

迴看後凋色、青翠有松筠。

■ [02-孟-11] 孟浩然：李少府與楊九再來

弱歲早登竜、今來喜再逢。
如何春月柳、猶憶歲寒松。
煙火臨寒食、笙歌達曙鐘。
喧喧鬪雞道、行樂羨朋從。

■ [02-孟-12] 孟浩然：清明日宴梅道士房

林臥愁春盡、開軒覽物華。
忽逢青鳥使、邀我赤松家。
金竈初開火、仙桃正落花。
童顏若可駐、何惜醉流霞。

■ [02-孟-13] 孟浩然：尋梅道士張逸人

彭澤先生柳、山陰道士鵝。
我來從所好、停策漢陰多。
重以窺魚樂、因之鼓枻歌。
崔徐迹未朽、千載揖清波。

■ [02-孟-14] 孟浩然：梅道士水亭

傲吏非凡吏、名流即道流。
隱居不可見、高論莫能酬。
水接仙源近、山藏鬼谷幽。
再來迷處所、花下漁舟問。

■ [02-孟-15] 孟浩然：登峴亭寄晉陵張少府

峴首風湍急、雲帆若鳥飛。

憑軒試一問、張翰欲來歸。

■ [02-孟-16] 孟浩然：晚泊潯陽望廬山

掛席幾千里、名山都未逢。

泊舟潯陽郭、始見香爐峰。

嘗讀遠公傳、永懷塵外踪。

東林精舍近、日暮但聞鐘。

■ [02-孟-17] 孟浩然：自潯陽泛舟經明海

大江分九流、淼淼成水鄉。

舟子乘利涉、往來至潯陽。

因之泛五湖、流浪經三湘。

觀濤壯枚發、弔屈痛沅湘。

魏闕心恒在、金門詔不忘。

遙憐上林雁、水泮已迴翔。

■ [02-孟-18] 孟浩然：下贛石

贛石三百里、沿洄千嶂間。

沸聲常浩浩、洑勢亦潺潺。

跳沫魚鼉沸、垂藤猿狖攀。

榜人苦奔峭、而我忘險艱。

放溜情弥愜、登艫目自閑。
暝帆何處宿、遙指落星灣。

■ [02-孟-19] 孟浩然：九日於菴沙作寄劉

菴沙予章北、九日掛帆過。
風俗因時見、湖山發興多。
客中誰送酒、棹裏自成歌。
歌竟乘流去、滔滔任夕波。

■ [02-孟-20] 孟浩然：早寒江上有懷

木落雁南度、北風江上寒。
我家襄水上、遙隔楚雲端。
鄉淚客中盡、孤帆天際看。
迷津欲有問、平海夕漫漫。

■ [02-孟-21] 孟浩然：泝江至武昌

家本洞湖上、歲時歸思催。
客心徒欲速、江路苦遄迴。
殘凍因風解、新正度臘開。
行看武昌柳、髣髴映陽台。

■ [02-孟-22] 孟浩然：唐城館中早發寄楊使君

犯霜驅曉駕、數里見唐城。

旅館歸心逼、荒村客思盈。
訪人留後信、策蹇赴前程。
欲識離魂斷、長空聽雁聲。

■ [02-孟-23] 孟浩然：夕次蔡陽館

日暮馬行疾、荒城人住稀。
聽歌知近楚、投館忽如歸。
魯堰田疇廣、章陵氣色微。
明朝拜嘉慶、須著老萊衣。

■ [02-孟-24] 孟浩然：送辛大不及

送君不相見、日暮獨愁緒。
江上獨徘徊、天邊迷處所。
郡邑經樊鄧、山河入嵩汝。
蒲輪去漸遙、石徑徒延佇。

■ [02-孟-25] 孟浩然：江上別流人

以我越鄉里、逢君謫居者。
分飛黃鶴樓、流落蒼梧野。
馭使乘雲去、征帆沿溜下。
不知從此分、還袂何時把。

■ [02-孟-26] 孟浩然：鸚鵡洲送王九之江左

昔登江上黃鶴樓、遙愛江中鸚鵡洲。
洲勢逶迤還碧流、鴛鴦鸕鶿滿灘頭。
灘頭日落沙磧長、金沙熠燿動颯光。
舟人牽錦纜、浣女結羅裳。
月明全見蘆花白、風起遙聞杜若香、君行來來莫相忘。

■ [02-孟-27] 孟浩然：送元公之鄂渚尋觀主

桃花春水漲、之子忽乘流。
峴首離蛟浦、江中問鶴棲。
贈君青竹杖、送爾白蘋洲。
忘是神仙子、相期汗漫遊。

■ [02-孟-28] 孟浩然：送告八從軍

男兒一片氣、何必五車書。
好勇方過我、多才便起余。
運籌將入幕、養拙就閑居。
正待功名遂、從君繼兩疏。

■ [02-孟-29] 孟浩然：送莫氏外生兼諸昆季從馬入西軍

念爾習詩禮、未嘗逢戶庭。
平生早偏露、万里更飄零。
坐棄三牲養、行觀八陣形。
飾裝辭故里、謀策赴邊廷。

壮志吞鴻鵠、遙心伴鶴鷄。

所從文与武、不戰自忘寧。

■ [02-孟-30] 孟浩然:送王宣從軍

才有幕中士、寧無塞上勳。

隆兵初滅虜、王粲始從軍。

旌旆辺庭去、山川地脈分。

平生一七首、感激贈夫君。

■ [02-孟-31] 孟浩然:送陳七赴西軍

吾觀非常者、碌碌在目前。

君負鴻鵠志、蹉跎書劍年。

一聞辺烽動、万里忽爭先。

余亦赴京国、何当獻凱還。